

# 史跡 斎宮跡

斎宮小学校内発掘調査報告

1985.3

明和町教育委員会

## 校舎、体育館の竣工を記念して

斎宮跡は、昭和54年3月に国史跡として指定されました。本町といたしましても、斎宮跡の保存に携わった先人達の意志を受け継ぎ、文化遺産として永く後世に伝え、広く文化の向上に活用していきたいと考えております。

斎宮小学校は、近年、児童数の増加と建物の老朽化が著しく、新しい校舎等の施設の建設が必要にせられてまいりました。しかし、斎宮小学校は、指定以前から斎宮跡範囲内に位置することは明らかであり、学校建設と遺跡保存の両面の立場で進めていかなければならず、文化庁の指導を得ながら、絶えず関係諸機関と協議を重ねてまいりました。その結果、第15次調査で検出された四輪門につきましては、校舎の床下に現状保存をし、第48-1次調査（プール建設）、第48-13次調査（校舎増築）、第53-1次調査（体育館建設）で検出された遺構につきましては、建物等の基礎が遺構に影響を及ぼさないよう特殊な工法で保存することにいたしました。史跡の町として、まことに意義深いことと存じます。

ここに校舎・体育館の竣工を記念して、昭和52年から5回にわたって行いました発掘調査の成果と遺構保存の報告をいたすことになりました。この報告が斎宮跡究明の一助になれば幸甚であります。

調査及び遺構保存に御指導いただいた文化庁仲野浩主任調査官、三重大学助教授北原理雄氏、発掘調査に御協力、御指導をいただいた三重県斎宮跡調査事務所をはじめ関係各位に深く感謝いたします次第であります。

昭和60年3月30日

明和町教育委員会  
教育長 永野 由太郎

## 目 次

I	前 言	1
II	第 15 次 調査	6
III	第48—1次調査	22
IV	第48—13次調査	32
V	第53—1次調査	41
VI	第53—14次調査	49
VII	結 語	52
(付) 学校施設建設にともなう遺構の保存		56

## 挿図目次

fig.		fig.		
1.	遺跡位置図	1	30. 第48-13次遺構実測図	32
2.	齋宮小学校周辺航空写真	2	31. 第48-13次全景	34
3.	遺構配置図、調査区位置図	3	32. 全景・S B3381・S B3383・S B3367	35
4.	発掘調査風景	5	33. S X3380	36
5.	第15次全景	7	34. S B3381・S B3383出土土器	37
6.	第15次遺構実測図	7	35. S B3381・S B3391出土土器実測図	37
7.	S B 710・S X 705・S X 715	8	36. S B3370・S B3383出土土器実測図	38
8.	S B 700・S A 706・S A 713	9	37. S B3385出土土器実測図	39
9.	S E 720・S X 725	10	38. S K3368出土土器	39
10.	S X 705出土土器	11	39. S K3368・S K3388・S X3380出土土器実測図	40
11.	S B 710・S X 705出土土器実測図	11	40. S X3380出土土器	40
12.	S X 715出土土器実測図	12	41. 第53-1次全景	41
13.	S X 715出土土器	13	42. 第53-1次遺構実測図	42
14.	S X 715出土土器実測図	15	43. S B3770・S B3771・S B3773・S B3772	43
15.	S D 704・S D 711出土土器	16	44. S B3778・S K3777・S D3372・S D3369	44
16.	S K 708・S D 707・S D 704出土土器実測図	16	45. S B3771・S B3774出土土器実測図	46
17.	S E 720出土土器実測図	18	46. S B3771・S B3774・S B3775・S D3784	47
18.	S E 720出土土器	19	出土土器	47
19.	S E 720出土土器	20	47. S B3772・S B3770・S B3775・S B3776	47
20.	S D 711・S K 716出土土器実測図	20	出土土器実測図	47
21.	第48-1次遺構実測図	22	48. S K3781・S K3780・S D3784・S K3785・ S D3783・S D3372出土土器実測図	48
22.	第48-1次全景・S B2947・S B2952・S B2943	24	49. 第53-14次全景	49
23.	S B2944・S B2950・S D2949・S D2958	25	50. 第53-14次遺構実測図	50
24.	S B2948・S B2947出土土器	26	51. S D3802・S K3803出土土器実測図	50
25.	S B2948・S B2947・S B2952出土土器実測図	27	52. 四脚門保存工法図	56
26.	S B2952・S B2943出土土器	28	53. 四脚門保存状況	56
27.	S B2940・S K2945・S B2943出土土器実測図	29	54. 桜舎遺構保存工法図	57
28.	S K2946・S D2949・S K2951出土土器	30	55. 体育館遺構保存工法図	58
29.	S K2946・S K2951・S D2949・S K2962出土土 器実測図	31	56. 平板載荷試験・遺構埋め戻し状況	59

## 例　　言

1. 本書は国史跡斎宮跡内における明和町立斎宮小学校関連施設建設に伴う事前発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 発掘調査は次の期間に実施した。

第15次調査（校舎建設）	昭和52年8月10日～10月3日
第48-1次調査（プール建設）	昭和58年6月1日～6月30日
第48-13次調査（校舎増築）	昭和59年2月20日～3月31日
第53-1次調査（体育館建設）	昭和59年3月27日～5月9日
第53-14次調査（体育庫移転）	昭和60年2月22日～3月5日
3. 発掘調査は明和町教育委員会が主体となり、三重県教育委員会文化課および三重県斎宮跡調査事務所の指導、協力をうけた。
4. 遺物整理および報告書作成は三重県斎宮跡調査事務所の山沢義貴、谷本親次、福村直人、倉田直純、および明和町教育委員会中野敦夫があたり、調査事務所の刀根やよい、豊田敏子、坂真弓美がこれに協力した。
5. 発掘調査にあたり明和町斎宮跡保存対策室、斎宮小学校には種々お世話をになった。
6. 発掘調査後の遺構保存については文化庁記念物課および三重大学助教授北原理雄氏の指導を得た。
7. 本書に使用した遺構標示等の記号はすべて三重県斎宮跡調査事務所年報に準じている。

## I. 前　　言

斎宮跡は伊勢神宮へ遣わされた斎王の館と、その事務を取り扱う斎宮寮という役所からなり、古代、中世を通じ、国家と神宮との関り、斎宮を中心とした文化、経済および財政などを考えるうえに欠く事のできない特異な遺跡である。伊勢に遣わされた最後の斎王槿子内親王が文永9年(1272)に帰京した後、斎宮は荒れはて、人々から忘れられていった。幕末より明治にかけ斎王制度の復興運動がおこり、大正期には史跡指定の運動もあったが、いずれも実現しなかった。昭和40年代の宅地開発ブームの中で、再び斎宮跡は注目されるようになった。昭和45年の古里地区での宅地開発に端を発した発掘調査は、その後の宮城範囲確認調査とともに多くの貴重な遺構、遺物の検出があり、県内外の保存を望む声と、地元住民の深い理解により、昭和54年3月の史跡指定をみるにいたった。

斎宮跡は櫛田川の分流である祓川をのぞむ低位段丘上にある。標高10m～14mで北東に向かってゆるやかに傾斜をし、明和町斎宮、竹川、坂本にまたがる東西2km、南北0.7kmの140haにおよぶ広大な区域を占めている。宮城の南側を近鉄および旧参宮街道がとおり、住宅が密集している。近鉄線の北側は松林、雜木林が点在する田畠であるが、近年、宅地化が進んでいる。

斎宮小学校は史跡の中央西寄りにあり、近鉄斎宮駅の西方370mの箇所である。竹川と斎宮の



fig.1 遺跡位置図 (1:50000)

境界部分であるこの地に斎宮小学校が建設されたのは明治42年7月であった。それまでの斎宮の蓮光寺跡にあった斎宮尋常小学校と、竹川花園にあった花園尋常小学校を合併して、当地に新校舎が建築され斎宮尋常小学校となったものである。その後、斎宮国民学校、斎宮小学校と名称がかわり、校舎も増築され、講堂やプールが造られるなど、増改築が幾度となくおこなわれてきた。

昭和40年代の後半になり、校舎の老朽化と児童数の増加により、小学校建設の必要性がとなえられてきた。当時、この地には校舎3棟、特別教室や給食棟さらに講堂兼体育館、プール、若竹保育園などの多くの施設があった。史跡指定前であったが、この地は史跡内であることは明らかであり、指定の際にも小学校建設の可否が論議された。小学校の移転等も含めて種々協議が繰り返しなされたが、結局、現在地で再建されることに決まり、まず、昭和53年度には校舎の一部が建設されるにいたった。

昭和53年度の校舎建築は、北側にあった木造校舎を壊し、三階建の校舎を建設するもので、史跡指定前であったが、校舎部分1,100m<sup>2</sup>の発掘調査（第15次）を実施した。調査は明和町教育委員会が主体となり県教育委員会文化課職員が担当した。奈良時代の竪穴住居や、円形周溝、平安時代後期の菜地跡、四脚門の他、平安時代末期の井戸などが検出されている。四脚門の一部は校舎下に現状保存され、校内の廊下に説明板とともに標示されている。

昭和58年度のプール建設は、これまで校舎西側にあった既設プールを取り壊し、北側の若竹



fig.2 斎宮小学校周辺航空写真

fig.3 造構配図 (1:400)・調査区位置図 (1:2000)

奈良時代前期

平安時代中期

奈良時代中期

平安時代後期

奈良時代後期

平安時代末期

平安時代初期

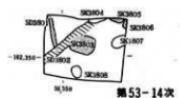
鎌倉時代

平安時代前期

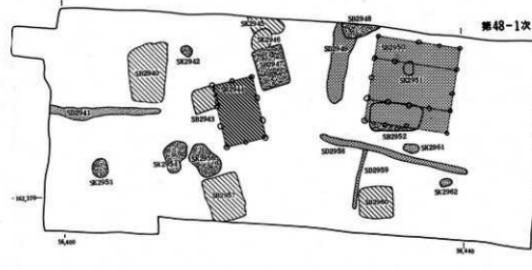
室町時代以降

不明

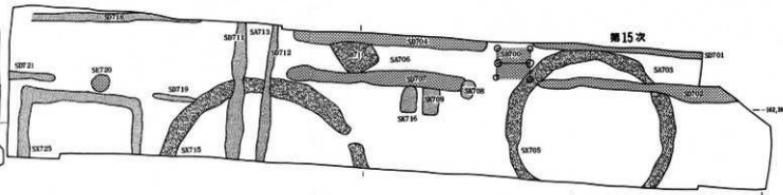
3270



第53-14次

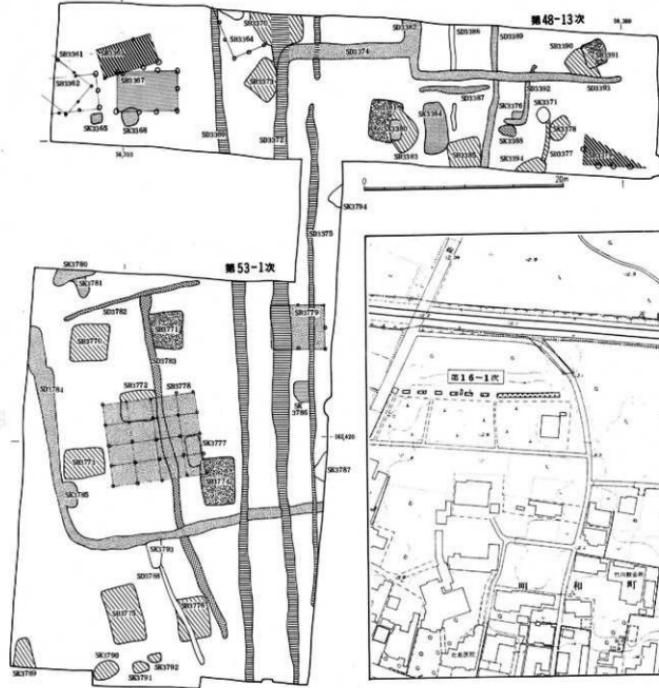


第48-13次 16.380

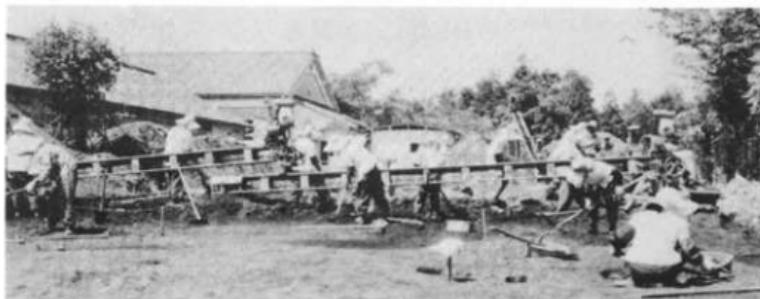


第15次

第53-1次







第15次調査



第53-1次調査

fig.4 発掘調査風景

保育園のあった個所に新しく建設するものであった。事前の発掘調査（第48-1次）を1,050m<sup>2</sup>に亘って実施したところ、奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物、土塁、平安時代の掘立柱建物、溝などが見つかった。

昭和59年度建設の校舎は昭和53年度に建設した校舎を西側に向かって延伸するもので、体育館は南西側に新設するものであった。いずれも850m<sup>2</sup>、1250m<sup>2</sup>について発掘調査（第48-13次・第53-1次）を実施した。一部破壊された個所もあったが、奈良時代の竪穴住居14、平安時代の掘立柱建物や溝などが検出された。さらに、翌60年に入り、校舎整備の中で、従来の体育庫の移転に伴う小規模な調査（第53-14次）を実施している。昭和58年度の発掘調査とともに、明和町教育委員会が三重県斎宮跡調査事務所の指導を得て実施した。

プールおよび校舎、体育館建設については、文化庁、県斎宮跡調査事務所とも種々協議を重ねるとともに、三重大学工学部助教授北原理雄氏の指導をうけ平板載荷試験やポーリング調査を実施し、検出した遺構は一切壊さないように設計変更し、建築することになった。

## II. 第15次調査

第15次調査は斎宮小学校校舎新築にともなう事前発掘調査である。調査地点は、斎宮小学校用地内でも最も近鉄線に近い、若竹保育園に接する部分に位置する。発掘調査にあたっては、古い平屋校舎を撤去した後、建物基礎盛土や延石の撤去もあって、現表土下約40cmまで重機により堆土した。調査地域は、校舎新築部分の外1m以内とし、東西78m、南北14mの範囲で1100m<sup>2</sup>について実施した。調査期間は、昭和52年8月10日から10月3日である。

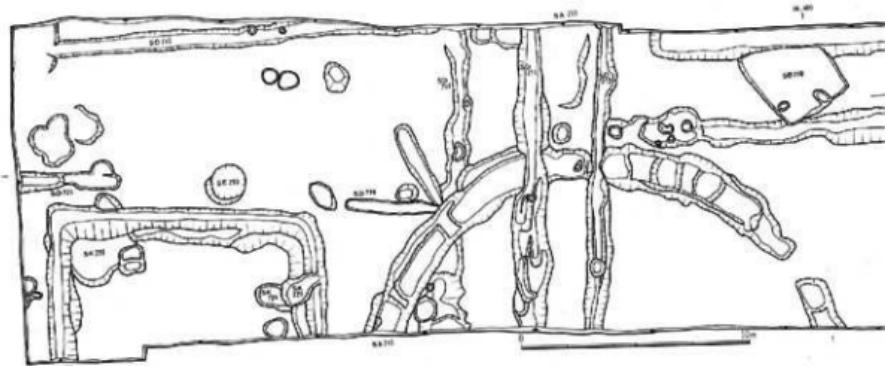
調査地区西側での標高は約13mを測る。自然地形としては東にいくにしたがいわずかに低くなっている。構造検出面である黄茶褐色地山も東端部が最も低く標高12.4mである。東部での土層をみると、約40cmの校舎盛土、15cmの旧表土、20cmの黒色土、その下が黄茶褐色地山となる。構造の保存状況としては、校舎直下にかかわらず良好であり、古い巨木の根の痕以外よく残っていた。

### 1) 奈良時代の遺構

この時期の遺構としては、竪穴住居1、円形周溝2のみで掘立柱建物はない。出土遺物からみていずれも奈良時代前期に属する。

竪穴住居S B 710は、調査区中央北部にあり後のS D 704によって北端部が切られているが、わずかに北西隅が残っており、3.8m×3.4mの長方形を呈し、深さ25cmを測る。北東隅に近い壁ぎわと東辺中央部の外に焼土を検出した。床面はほぼ平坦で、柱穴は不明である。

円形周溝は、東西に14mをへだて2基検出した。西側にあるS X 715は、南半部が調査区外にのびるが、幅1.8mの溝が半円形にめぐる。溝の内々の径は推定18.5mをはかり、東側のS



X 705より大きい。周溝の東部には幅1.1mの部分で掘り残しがあり、陸橋部をつくる。周溝の壁面はV字状に掘られ、全体としては底の平坦な比較的整然とした溝であるが、底部の各所には、さらに10cmから20cmの凹部があり、陸橋に近づくにしたがいやや浅くなる。周溝にかこまれた中央部は後の南北溝に切られる以外遺構はなく、平坦である。この平坦面からは遺物は検出されていないが、周溝内からは、土師器杯、皿、高杯、鉢、甕、須恵器杯、碗、皿、甕、台付長頸瓶など多くの種類の土器が出土した。このうち完形品に近いものもいくつかあり、他の時期の土器の混入は認められない。

東側のSX 705は周溝の内々径14mをはかる円形周溝。南端部が一部調査区外におよび未検



fig.5 第15次全景（西から）

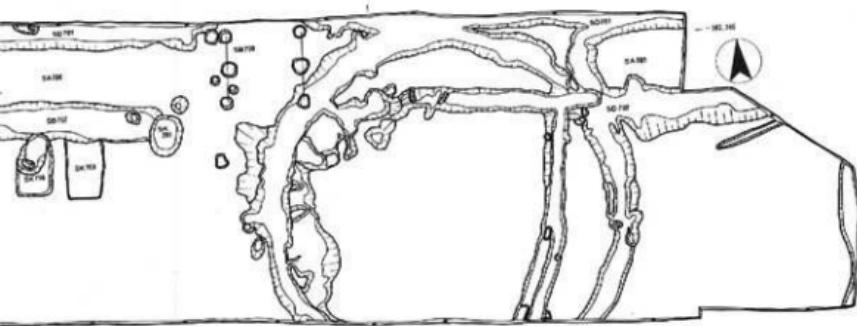


fig.6 第15次遺構実測図 (1:250)

出であるが、陸橋部分はない。溝幅も1.5m、深さ20cmから40cmと、S X 715よりやや小規模である。底部はほぼ平らでS X 715でみられたような凹部はない。底のレベルの細部をみると東南部が最も高く標高12.2mあり、左まわりに徐々に低くなり、北部で12m、西南部で11.9mと一番低い。溝内からは土師器杯、甕、須恵器長頸甕、横瓶が出土したが、S X 715よりはるかに量は少ない。周溝にとり囲まれた内部については後の時期の溝で切られる以外遺構はない。

以上のように円形周溝は、今次の調査で初めて検出され調査初期では古墳時代の円墳が削平され周溝のみが残存したものと考えたが、先述のように古墳時代にさかのぼる遺物は発見され



S B 710 (東から)



S X 705 (東から)



S X 715 (西から)

fig.7 S B 710・S X 705・S X 715

方向はE 3° Sである。主柱の掘形は径80cm、深さ50cmあって、径60cm、深さ50cmをはかる控柱より大きい。

門の東西にそれぞれ門と同様の方位をしめす2条の溝が取付く。西側のSD 707は幅0.9m～1.5m、深さ30cmの溝で、北に平行する溝SD 704の北の肩は調査区外におよび明らかでないが、同様の規模のものと思われる。

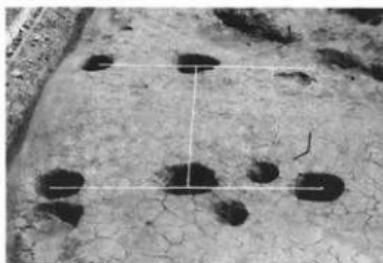
2条の溝とも門から西へ20mのびる。一方、門から東へもほぼ同様の間隔において2条の溝を20mにわたり検出したが、さらに東の調査区外にのびる。門に取付くこれら2条の溝にはさまれた部分の幅は約2.5mあり、この部分に境界に用いられる築地堀、あるいは柵、柴垣等が想定されるが、明瞭な遺構は確認できない。

調査区西部で検出した井戸SE 720は径1.5mの素掘りの井戸。深さ2.4mまで掘り下げたところ、崩落の危険があり、作業を中止したが、土師器杯、皿、椀、甕、灰釉陶器椀等多くの土器を検出した。

土塙SK 708は調査区中央の門の西にあり、1.8m×1.4m、深さ30cmの楕円形を呈する。少量の土師器杯、甕が出土した。

平安時代末期の遺構は、溝SD 711・SD 712・SD 718・SD 721・SD 719、方形周溝SX 725、土塙SK 716・SK 709、SK 708がある。

平行する2条の南北溝SD 711とSD 712は、調査区西寄りにあり、平安時代後期の溝SD 704・SD 707の西側1.5mにある。溝の方向は北で東に7°ふれており、一時期古い



SB 700 (西から)

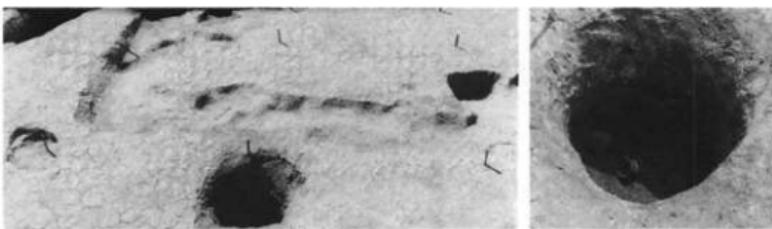


SB 700 + SA 706 (東から)



SA 706 + SA 713 (西から)

fig.8 SB 700 + SA 706 + SA 713



SE 720・SX 725 (北から)

SE 720

fig.9 SE 720・SX 725

東西溝とはわずかに直行しない。東側のSD 712は幅90cm前後、深さ40cm。西側のSD 711は、やや幅が広く1m～1.5m前後、深さも約70cmあり深い。溝にはさまれた平坦部の幅は北部で2.5m、南部で1.7mあり一定ではない。これらは門SB 700にとりつく部分とよく類似しており、同様の境界を示す構造物が想定されるが、明確にできない。

他の3条の溝はいずれも調査区西部にあって東西溝である。北側のSD 718は幅80cm、深さ20cmのよく整った溝で、ほぼ東西の方位にのる。この溝から5m南にあるSD 721・SD 719は連続する溝と考えられるが、SD 719が深さ5cmと浅い。

方形周溝SX 725は調査区西部にあって、南部が調査区外におよぶ。幅1m、深さ30cm～40cmの溝がN 5°Wを軸にして掘られており、溝に開まれた平坦な内部の内々の東西幅は9.5mをはかる。溝から少量の平安時代末期に属する土師器杯、甕が検出された以外、遺物はなく、遺構の性格は明らかでない。

土塙SK 716・SK 709は調査区中央部にありSD 707と重複する。両者とも0.8m×1.3m、深さ10cmをはかる略方形の土塙で、SK 716からは、土師器小皿、甕等が出土した。

### 3) 遺 物

今次調査で発見した出土遺物の大半は、奈良時代の竪穴住居、円形周溝と、平安時代の井戸から出土した土器類である。時期的にみて奈良時代中期から平安時代中期にかけての土器の出土量は非常に少ない。このような状況もあって、斎宮跡のなかでも中央部から東部にかけて、顕著にみられる綠釉陶器の出土はない。

奈良時代の土器が比較的多く出土した遺構のうち東部にある円形周溝SX 705出土土器(fig. 11-4～10)は土師器杯、鍋、甕、須恵器台付長頸瓶、横瓶、短頸壺、長頸瓶がある。

土師器杯のうち、(6)は、口径19cm、器高4.2cmをはかる大形深手の杯で、口縁端部がやや外反する。口縁部外面はヘラミガキで、底部下面はヘラケズリを施す。色調は、黄茶褐色。(7)は口径15.6cmとやや小形であるが、器高が3.8cmあり、口縁部内面に放射状暗文を施しており奈良時代前期の特徴をよくみせている。口縁部、および底部下面の技法は、保存状況が悪く不明である。

鍋(4)は、口径39cmをはかる大型品で、体部内外面にハケメがある。小片であるため明らかではないが、体部両側に把手が付くものだろう。

甕(5)は、口径・器高とも15cm。わずかに長い球形の体部に外反する口縁部をもち、体部外面と内面上半にハケメ、下半はヘラケズリ、器形・技法とも奈良時代前期のものである。

須恵器台付長頸瓶(8)は、口縁部および体部の一部を欠くもののほとんど完形に近い

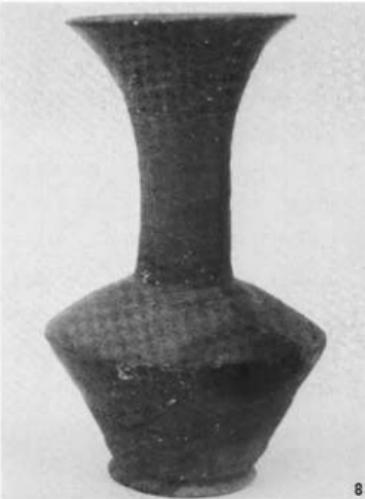


fig10 S X 705出土土器

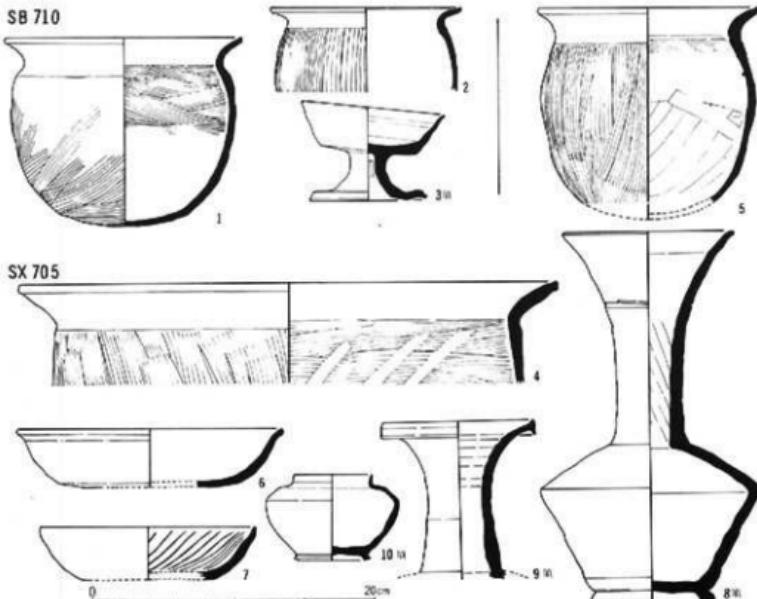


fig.11 S B 710 + S X 705出土土器実測図 (1 : 4)

もので周溝内でも西側の埋土中から発見した。外にふんばる短い貼付高台と強く屈折する体部と、沈線を入れたラッパ状に開く長い頸部とからなる。底部下面是不調整。体部下部をヘラケズリする。胎土中には、小石をふくみ暗青灰色を呈する。横瓶は、口径 8.6 cm、高さ 3.2 cm をはかる口頸部の破片である。

短頭壺（10）は、口径 7.5 cm、器高 6.2 cm をはかる小型のもの。外にふんばる高台を付け上部で肩の張った体部に、直立する短い口頸部がのる。長頸瓶（9）は、ラッパ状に強く開き端部が上下にせり出す、長い頸部で、外面の一方に自然釉が付く。ここでは一応、長頸瓶としたが、口縁端部の形態に問題は残るもの細頸瓶の頸部かもしれない。

S B 710 (fig.11-1~3) からは、土師器皿、須恵器高杯のみで量は少ない。土師器甌（1、2）とも赤褐色を呈し、体部外面と、内面上半がハケメ、下半がヘラケズリの技法をとるものと思われるが、いずれも内面の器表があれでいて明瞭ではない。（2）の体部外面のハケメは 1 cm の間に 4 本と通常みられるものよりあらい。また体部外面にはススの付着がある。高杯（3）は、基部から大きく外にひらき端部が下に折れて外に稜をつくる脚に、腰部が角張る深い杯部を取付けたもので沈線などの装飾はなく暗青灰色を呈する。

円形周溝 S X 715 (fig.12-1~6, fig.14-7~25) の周溝内埋土出土の土器は土師器皿、高杯、鉢、甌、須恵器杯、蓋、皿、碗、台付長頸瓶、甌がある。

土師器皿（10~12）は、口径 21 cm ~ 22 cm、器高 2.2 cm ~ 2.4 cm で口縁部がわずかに外反し、丸くおさまるもの（10・12）とわずかに内側へ肥厚するもの（11）がある。底部下面の調整技法

SX 715

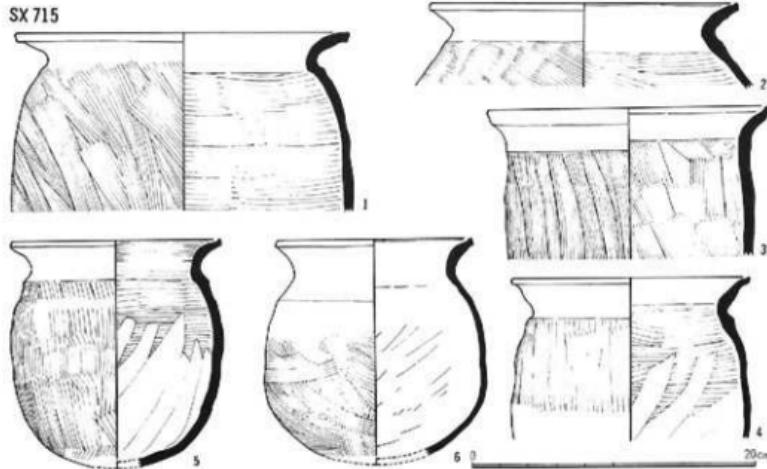


fig.12 S X 715出土土器実測図 (1:4)



6



17



26



23



22



13

fig.13 S X 715出土土器

は(11)がヘラケズリを施しているが、他は器表があれて、不明である。

高杯(8)は、口径25.5cmをはかる皿に脚部をとりつけたもので茶褐色を呈する。脚部接合部分に近いところにはハケメが残る。他はなし。脚部を欠くが、おそらく面取りを施さない、ハケメのある脚部が取り付くものと思われる。(9)は、8面に面取りをした脚。破片であるが、残存部分の形態から高さ5cm前後の短い脚であろう。

鉢(13)は、口径40cm、器高11cmをはかる大型のもので淡茶褐色を呈する。内外とも口縁部に幅1cmに6本程度のハケメがあり、また内外の底部にもヘラケズリをしている。

甕(1~7)には、口径24cm前後、器高40cm前後の通称長甕と呼ばれる長胴のもの(1)と肩の張った体部の丸い壺状のもの(2~7)肩部に張りのないやや長手の胴をもつものの(3)、口径・高さとも15cm前後の丸い体部をもつものの(5~6)等多くの種類がある。いずれも外反する口縁部の端部は上方に盛り上がりをみせる。器表の調整技法は、体部外面全体と、内面上半をハケメ、下半をヘラケズリするのが原則であるが、内面ハケメのないもの(6)、口縁部にまでハケメのおよぶもの(5)、内面に縦ハケメのあるもの(3)等ばらつきもある。ハケメは全般に1cm当たり8~10本と細かなものが普通だが、(4)の内外面、(7)の外面上半のように3~4本のあらいものもある。

須恵器杯(18~20・21)はいずれも破片で完形品はない。(18)は底の張り出した底部に折れまがる腰部より内側に高台のつく深い杯で底部下面をヘラケズリしており灰褐色を呈する。

(20・21)とも高台は(18)と同様腰部屈折部分より内側につき、底部下面是ヘラケズリにしている。また高台にかこまれた下面内部は少々摩滅し、墨が付着する。

蓋(15)は口径16cmをはかり、上面中央部まで右まわりのロクロでヘラケズリをおこなう。下面是若干摩滅しており、一部に薄く墨が付着している。

皿(19)は口径24cm・器高4cm。外傾する口縁部と腰部屈折部分より内側にはなれて高台をとりつけている。底部下面是小片で明らかでないがヘラケズリと思われる。椀には、口径10.5cm(16)と14.5cm(17)の大小2種類あり、(16)の底部下面にはヘラ切り痕がそのまま残り、(17)では、糸切り痕が明瞭に残る。碟(14)は口径12cmをはかるこの時期特有の小形品。屈折部分に沈線を1条めぐらす。

台付長颈瓶(22~24)には、体部上位で肩の張るもの丸味のある体部をもつものの(22)と肩部で強くおれまがる角形の体部のもの(23~24)の2種類がある。前者は端部を欠くもののや高い台が付くものと思われる。また頸部と体部にそれぞれ2条の沈線がめぐり体部下半は右まわりロクロでヘラケズリされている。色調は灰白色。後者の底部には杯などの高台と同様の角型の退化した台がつく。(23)の体部外面下方は右まわりロクロでヘラケズリをするが、(24)にはヘラケズリはない。(23)の肩部には自然釉がかかる。図示したもののほか、口縁

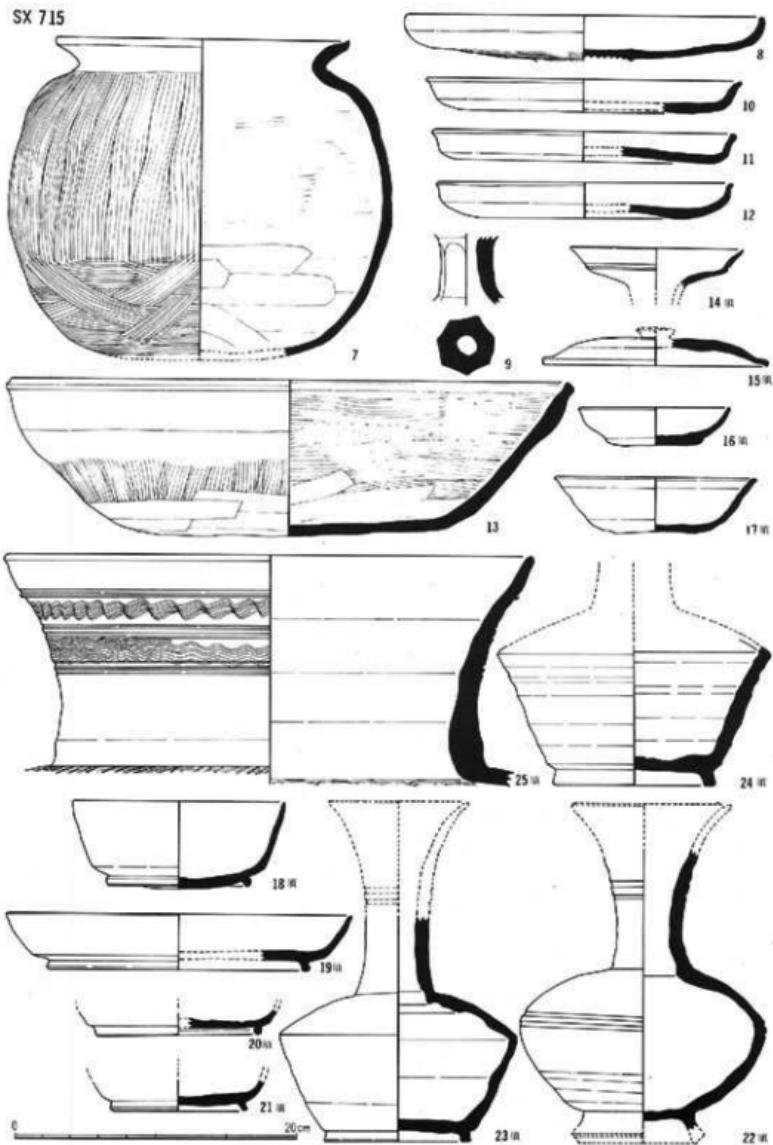


fig14 SX 715出土土器実測図 (1 : 4)

端部を欠く頸部破片があるが、いずれも2条の沈線をめぐらしている。

甕(25)は口径37cmをはかる大形甕の頸部で、外反する頸部上端近くでわずかに屈折し口縁端部がまるく終る特徴をもっている。外面には2条1組の沈線を3ヶ所にめぐらしその間に彌描波状文を描く。体部には外面に平行タタキ目、内面に同心円文が残る。

平安時代の遺物としては、前期と、後期、末期の各時期に属する土器がある。

S K 708 出土土器 (fig. 16-1・2) は、齋宮における土師器編年のうち平安時代前期の S K 3127 出土土器と類似するが、土師器杯と甕のみで、量はごく少ない。(2)は口縁部上半をヨコナデし、下半は指先でおさえるのみ。(1)は、口縁端部が内側に肥厚する甕で、体部外面は、1cm当たり8本の細かいハケメがある。体部内面は風化して不明。

溝 S D 707 (fig. 16-3~6)、S D 704 (fig. 16-7~11) 井戸 S E 720 (fig. 17-1~36) の3ヶ所から出土した土器は平安時代後期のものと大きくとらえられるが、前2者が齋宮跡土器の編年からは S E 2000 にふくまれ一時期古く、後の井戸 S E 720 は S K 1730 の範囲に入り、後期のなかでも新しい時期が与えられよう。

S D 707 出土土器のうち土師器皿は口径 11.5cm~13.5cm。口縁部上方をヨコナデし、それより底部下面は不調整で凹凸がある。色調は、淡黄褐色を呈し、胎土中に砂が多い。

(3)は口縁端部が肥厚し段をつくる甕で、内外の体部はともにハケメがあるが、外面のそれは、1cm当たり4本とあらくなっている。(6)は、長頭瓶の破片。体部外面はヘラケズ SK 708



fig. 15 S D 704・S D 711出土土器

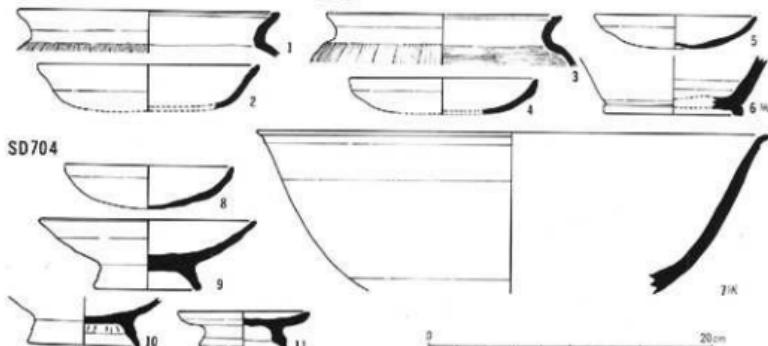


fig. 16 S K 708・S D 707・S D 704出土土器実測図 (1:4)

りしており、淡緑色の灰釉がつく。

S D 704 出土土器も量は少ない。(8)は、口径12cm、器高3.2cmの杯で、口縁端部から内面にかけてヨコナデし底部下面は、不調整。(9)と(10)は、高台のつく土師器椀で形態はよく似ているが、前者の底部下面には糸切り痕が残り、口縁部にロクロ目があり、茶褐色を呈す。後者は乳白色を呈し、糸切り痕はない。(11)は、高台のつく小型の皿で、底部下面は指先でおさえている。(7)は、口径36cmをはかる大型の灰釉鉢。底部を欠くが、高台のつくものと思われる。口縁部外面は広くヘラケズリを施している。内外とも風化して明瞭でないが、わずかに灰釉が残る。

S E 720 (fig. 17) 出土土器は、比較的豊富で土師器杯・椀・皿・甕、山茶椀がある。土師器杯(3~6)は口径15cm前後、器高3.5cm前後。(6)のように器高の大きい椀に近いタイプもある。口縁端部がヨコナデによりごくわずかに外反するものが多い。いずれも淡黄褐色を呈し、胎土中に砂の多い土が使われている。

口径10cm前後の浅い皿(8~17)は、大半が従来の手づくねの土師器であるが、(8~10)は、ロクロ目と糸切り痕の残るロクロ水びきされたもので、(17)は口径が大きいが同様の製作技法が用いられている。

口径15cm前後の土師器椀(18~30)には2つのタイプがある。1つは、大きく内寄する口縁部と高い高台からなる手づくねのもの(18~23)であり、もう1つは、ゆるく内寄し、端部でわずかに外反する口縁部と低い高台からなりロクロで水びきされたもの(24~30)の2種類である。後者の底部下面には、糸切り痕が明瞭に残る。前者は黄白色を呈しあらい土で作られているが、後者は、淡黄褐色を呈し比較的細かい土を用いている。前者のうち(19)の底部内面にはひろく布痕がつく。

甕(1、2)は球形の体部に口縁端部が肥厚する口縁がつくもので、体部内外面ともハケメをもたない。

山茶椀(31~35)は、やや腰の張った口縁部の椀で、口径16.5cm前後、器高5.5cm前後。口縁部に4ヶ所の輪花を施すものが多い。底部下面中央部にはいずれも糸切り痕が残っているが、高台の取付けは比較的丁寧である。(35)の内外には風化しているが灰釉がわずかに残っている。(36)は赤褐色を呈する小形の角鉢で、常滑焼と思われる。

溝 S D 711 (fig. 20-1~3)、土塙 S K 716 (fig. 20-4~7) 出土土器は平安時代末期に位置づけられるが、その量は少ない。

S D 711 出土土器のうち(1)と(2)は口径14.5cm、器高2.5cmの土師器杯。口縁端部がヨコナデされ、断面が角状に厚くなる。黄褐色を呈し、砂の多い土を使っている。(3)は、口径18cm、器高5.5cm。わずかに腰が張り、丁寧な作りながらやや低い高台のつく山茶椀である。

SE 720

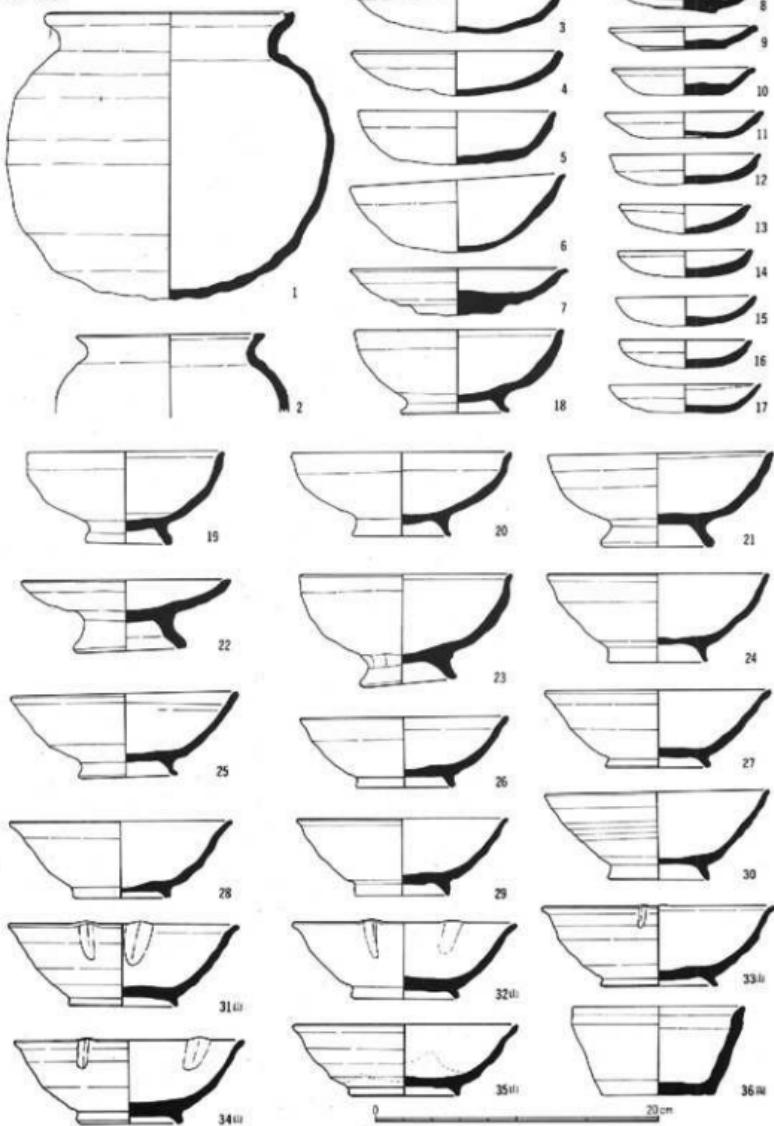


fig.17 SE 720出土土器実測図 (1 : 4)

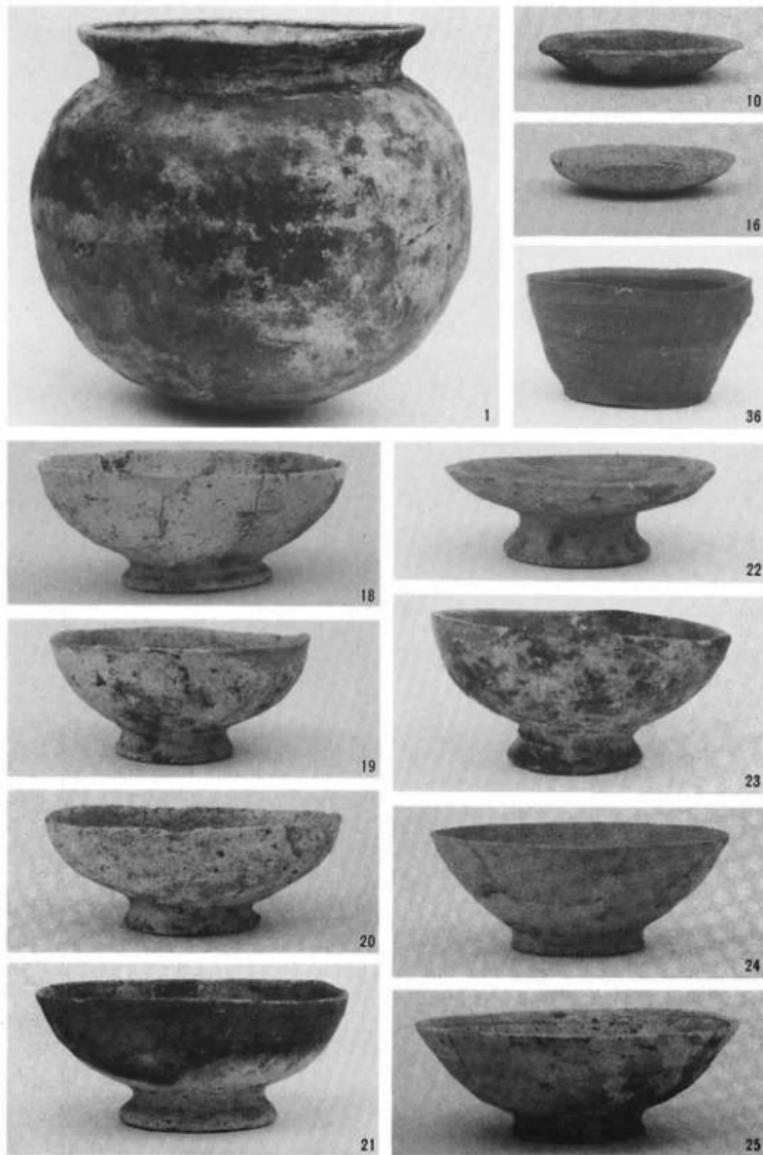


fig.18 S E 720出土土器

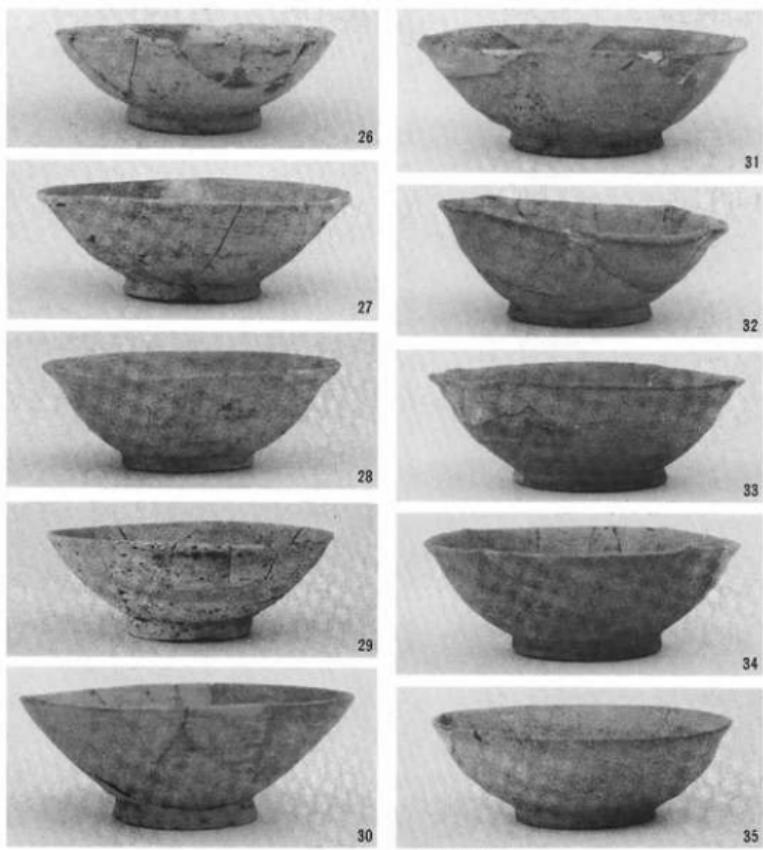


fig19 S E 720出土土器

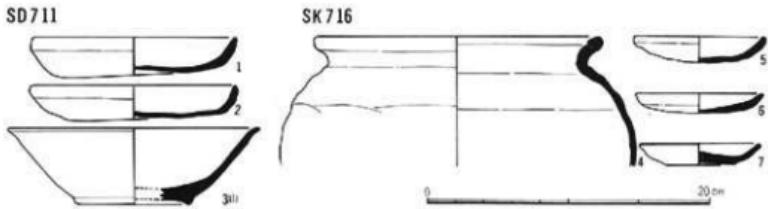


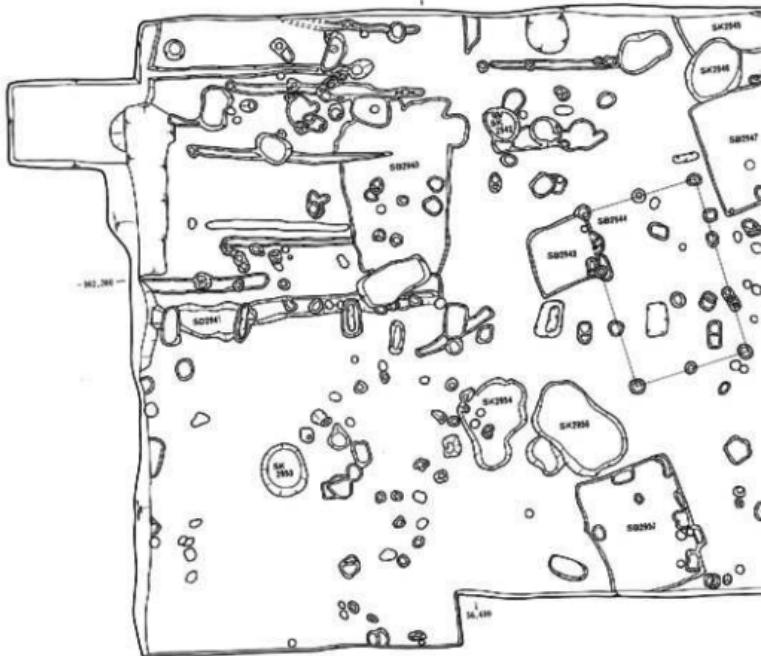
fig20 S D 711・S K 716出土土器実測図

S K 716 出土土器は土師器皿と甕のみである。 (5) と (6) は口径9.5cm、器高1.5cm～2cmの小型の皿で、S D 711 出土の杯と同様、口縁端部が厚くなり、ヨコナデしており、土も粗い。(7) は糸切り痕を残すロクロびき土師器皿。(4) は体部のまるい、口縁端部が内側に肥厚する甕で、内外ともハケメではなく、体部外面はヘラケズリを施す。

### III 第48-1次調査

これまで若竹保育園として昭和55年3月まで使用していた建物を撤去して、プールを建設するために実施した事前発掘調査である。近鉄線と校舎に挟まれた所で、東西50m、南北20mの範囲で約1,050m<sup>2</sup>を昭和58年6月1日より30日にかけて実施した。これまでにこの付近では昭和52年の第15次調査や個人住宅建設に伴う昭和54年の第25-9次調査を実施しており、今回の調査は第15次調査で検出した四脚門のすぐ北側での調査であったため、四脚門と関連する遺構の検出が期待された。

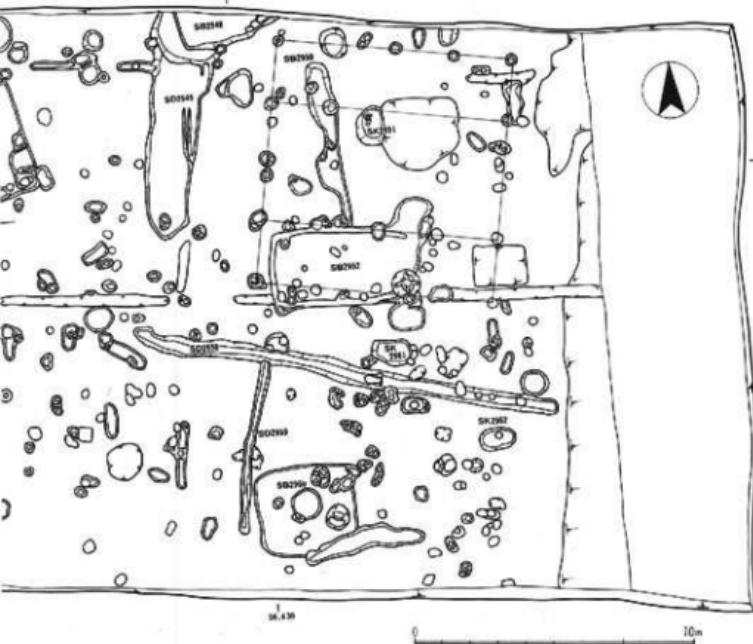
調査箇所は標高12.7mではほぼ平坦である。地表より約40cmの厚さで暗茶褐色土がある。この土は保育園建設の際かあるいはそれ以前に盛土したものと考えられ、その下に黒色土が25cm程堆積しており、その下が黄茶褐色の地山となる。遺物はこの黒色土に含まれており、遺構の埋土も黒色土が多い。遺構の検出は地山上面まで掘り下げなくてはならなかった。



一方、調査区の各所に建物の基礎部分が地山までおよんでいる個所や、ゴミ穴などの後世に擾乱された所が見られ、部分的に遺構が破壊されていた。

### 1) 奈良時代の遺構

竪穴住居7、掘立柱建物1、土塙6などがある。竪穴住居はいずれも方形で、2.6m四方の小形のものから、5.5m×3.6mと長方形の大形のものまであり、重複するものはない。調査区東部分のSB2948・SB2952・SB2960は東西に長く、他の西側のものは南北に長い。竪穴の深さは10cmから36cmと様々であるが、床面の標高はSB2960が12.0m、他は全て11.85m前後である。主柱穴は明瞭でないが、不規則なビットが壁近くや、床面に見られる。SB2943・SB2947・SB2952・SB2957の4戸の住居の東壁近くに焼土が残っており、カマドがあった所と思われる。またSB2952は壁下に幅20cm、深さ5cmの周溝がカマドのある東側を除きめぐっている。これらの竪穴住居は出土土器から奈良時代前期（SB2947・SB2948・SB2952）と、中期（SB2940・SB2943・SB2957・SB2960）とに区分出来、後期に属する竪穴住居は無

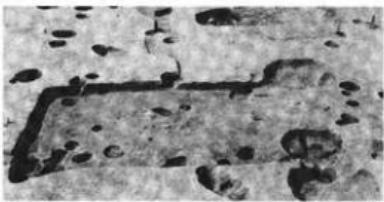




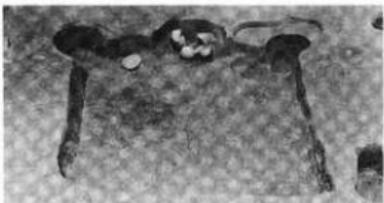
全 景 (東から)



SB 2947 (北西から)



SB 2952 (南から)



SB 2943 (南西から)

fig.22 第48-1次 全景・SB 2947・SB 2952・SB 2943

い。これらの中でもSB 2947はもう少し古い時期に遡るかもしれない。

SB 2944は調査区中央で検出した奈良時代唯一の掘立柱建物で、SB 2943の東側に重複している。3間×2間の南北棟の建物で、棟方向は北に対して12°近く西へふれている。柱間は桁行、梁行ともに2.1mである。柱掘影は径50cmの円形で、深さ25cm～50cmで、奈良時代後期の土器片が出土している。

土塙も竪穴住居同様に奈良時代前期(SK 2942・SK 2953・SK 2954・SK 2956)と中期(SK 2945・SK 2946)とがある。前期の土塙は径1.5mの楕円形のものと、径2.3m×3.5mの長楕円形を呈するものとがある。いずれも深さ50cm前後の浅いものである。中期のものはSB 2947の北側で、2個が重複している。SK 2946は径2mの円形で、深さ55cm、SK 2945は深さ20cm足らずで、西側の壁は直線的であり、あるいは竪穴住居の東側に別の円形の土塙が重複したものかもしれない。この2個の土塙からは比較的多数の土器

が出土している。

## 2) 平安時代の遺構

掘立柱建物1、土塙3、溝4がある。これらの中で最も古いものは土塙SK2951である。調査区の東北隅近くで検出したもので、土塙の東半部は新しい穴で壊されているが、径1.5mの円形で、30cmと浅い。平安時代前期の土塙で、土師器杯、製塩土器、灰釉陶器壺などが出土している。

続いて平安時代後期の掘立柱建物SB2950、溝SD2949・SD2958・SD2959がある。SB2950はSK2951に重複して検出。東西棟の建物で、4間×2間の身舎に、南と北に廂をもつ二面廂付建物である。奈良時代のSB2944とは逆に建物の柱通りは北に対して東へ約10°傾いている。柱掘形はやや不揃いだが、径40cm～60cmの円形で、深さ20cm～40cmである。SD2949は幅1.8mの幅広で、浅い南北に走る溝である。北端部はSB2948に重複している。土師器杯、碗が出土している。SD2958はSD2949に比べ溝幅が狭く、幅60cm、深さ25cmの東西溝である。このSB2949、SD2958の2条の溝はSB2950よりほぼ2.5m離れて、建物の柱通りに並行しており、あるいはSB2950の雨落溝かもしれない。SD2959はSD2958に直交する幅30cm、長さ6mの細長い溝である。少量の土師器片が出土している。

土塙SK2961・SK2962は平安時代末期の



SB2944 (南から)



SB2950・SD2949・SD2958 (南から)

fig.23 SB2944・SB2950・SD2949・SD2958

小土塹である。調査区の東寄りで S D 2958 の両側で検出。径 0.8m × 1.5m、深さ 25cm の楕円形の土塹である。S D 2962 からは土師器小皿が多数出土している。

以上その他に多くの不整形な土塹、溝、ピットがあるが、遺物の出土が無かったり、建物としてまとまらなかったりして、時期、性格が不明である。

### 3) 遺 物

出土遺物の大半は、竪穴住居や土塹から出土した奈良時代の土師器であり、平安時代の土器は量的に少なく、平安時代前期のものと末期のものがわずかに認められる。

奈良時代の土器は齋宮跡出土土師器の編年に基づき、大きく分けて前期のものと中期のものがある。

前期の土器には、竪穴住居 S B 2948、S B 2947、S B 2952 出土のものが比較的良好であり、土師器杯・皿・甕・鍋・台付杯・台付皿・甑、須恵器杯などがある。量的には土師器甕類が最も多いが口縁部片や胴部片のみで完形品は少ない。甕は胴部の長い通称長甕と呼んでいるもの (fig 25-5・12・14)、口径 16cm 前後で体部が球形に近いもの (fig 25-6・13)、体部が扁平で楕円形に近いもの (fig 25-15・16) がある。器面の調整は体部外面を縱方向にハケメを施し、内面は横方向にハケメを施したり、横ないし縱方向にヘラケズリしている。ハケメは 1cm に 6 本～9 本で平安時代の甕に比べて細かい。また口縁端部は面をなすものと丸くおさまるもののが

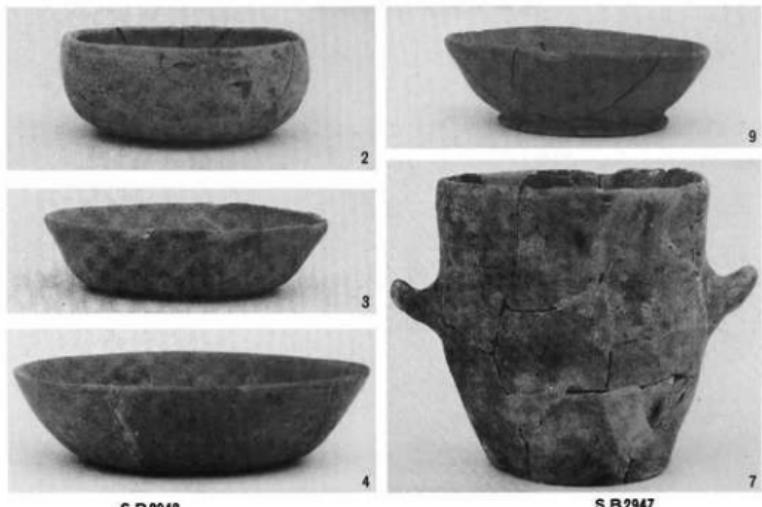


fig. 24 S B 2948・S B 2947 出土土器

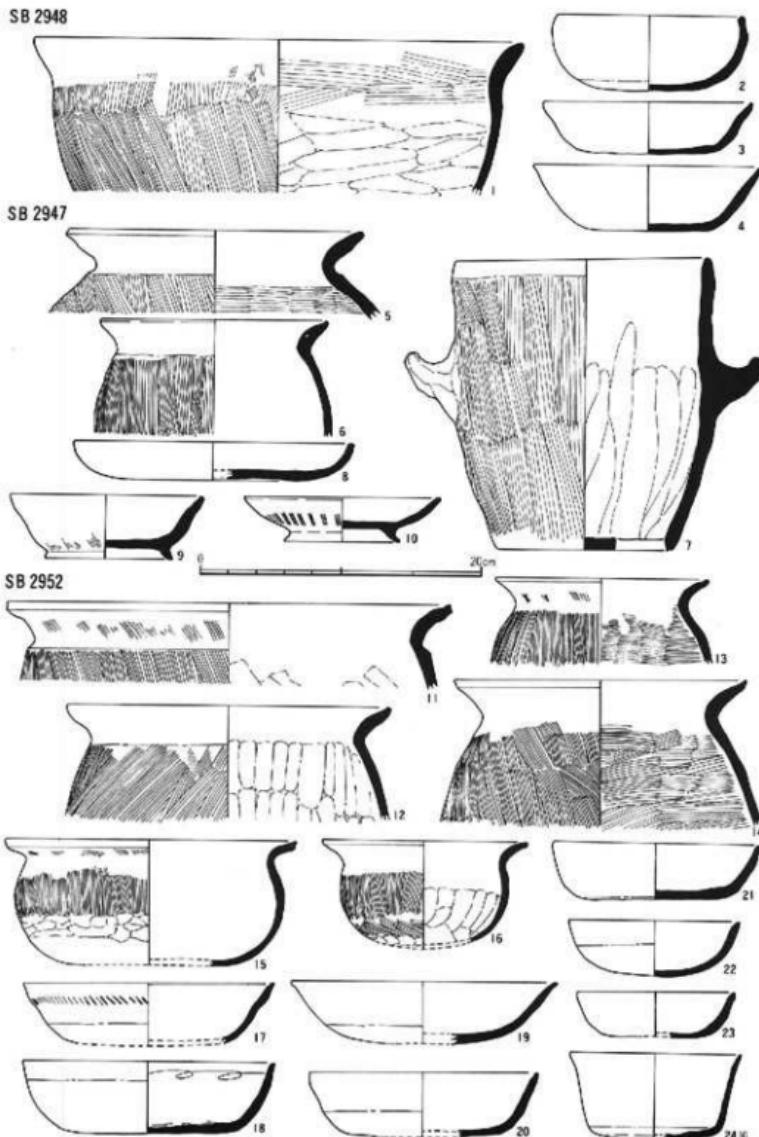


fig 25 SB 2948 • SB 2947 • SB 2952 出土土器実測図

ある。(1)は把手の付く鍋と思われる。土師器杯は口径16.5cm~18cm、器高5cm前後の大形のもの（fig 25-1・18・20）と、口径15cm前後、器高4cm前後のやや小形のもの（fig 25-3・21）があり、いずれも色調は赤褐色を呈している。また(2)のように口縁部が外側へ大きく開くタイプのものも少量みられる。器面の調整は、底部未調整のものが多いが、中には、(18)のように口縁部近くまで外面をヘラケズリし、内面に螺旋暗文を描くものもある。(2・22・23)は、淡褐色を呈し、胎土も若干粗く、通称いなか風椀と呼んでいる一群である。

奈良時代中期の土器には、竪穴住居S B2940、S B2943、土塙S K2945などから出土のものがある。各器種の構成は、前期のものと大差なく、また杯、皿、甌の器面の調整もほとんど変化は認められない。こうした中で土師器杯は、前期の杯のように器高の深いもの（fig 27-3）も若干認められるが、全体的には、前期の杯に比べて口径に対する器高の割合が減じており、やや浅くなった印象をうけるもの（fig 27-4・18・19, fig 29-2）が多い。土師器皿は器壁の厚い底部に内弯気味に立ち上がる口縁部から成り、口径は22cm前後。口縁端部が内側に丸く肥厚するもの（fig 27-21, fig 29-3）と丸くおさまるもの（fig 27-11・20）があり、なかでも、(3)は口縁部内側に粗い放射状暗文、底部に螺旋暗文が施されている。器面の調整は口縁部をヨコナデし、底部をヘラケズリするb手法が多い。



fig.26 S B2952・S B2943出土土器

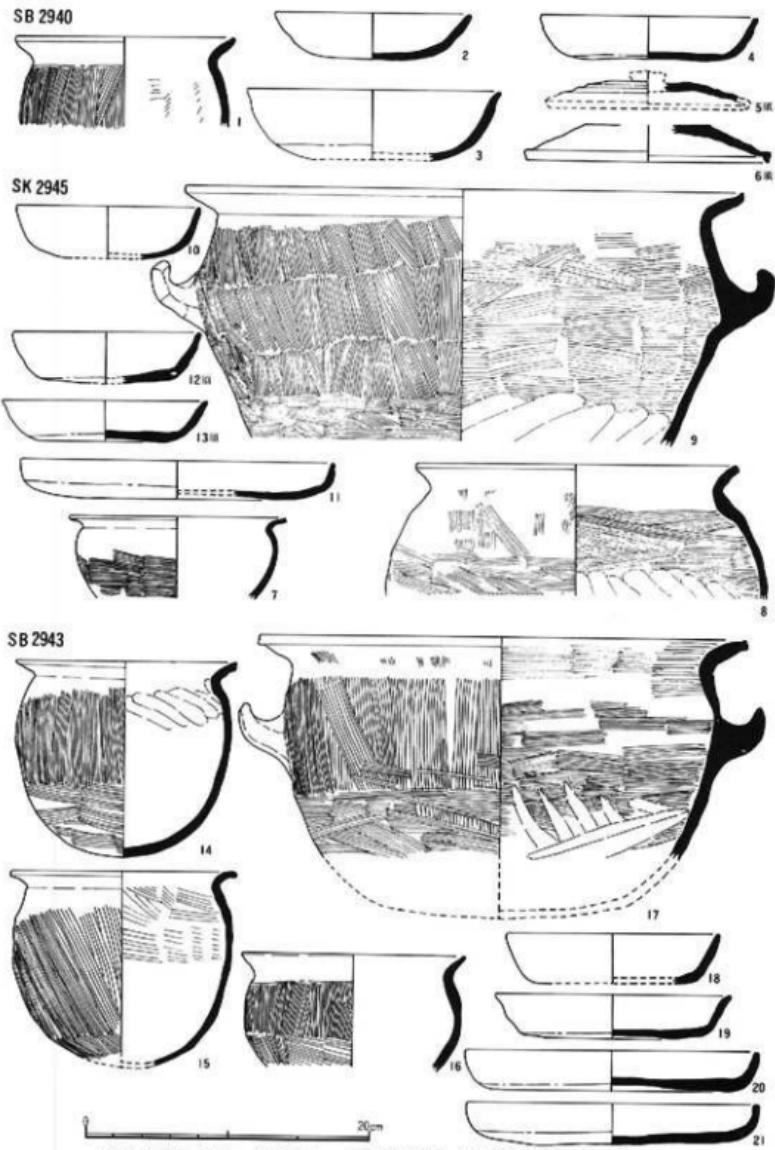


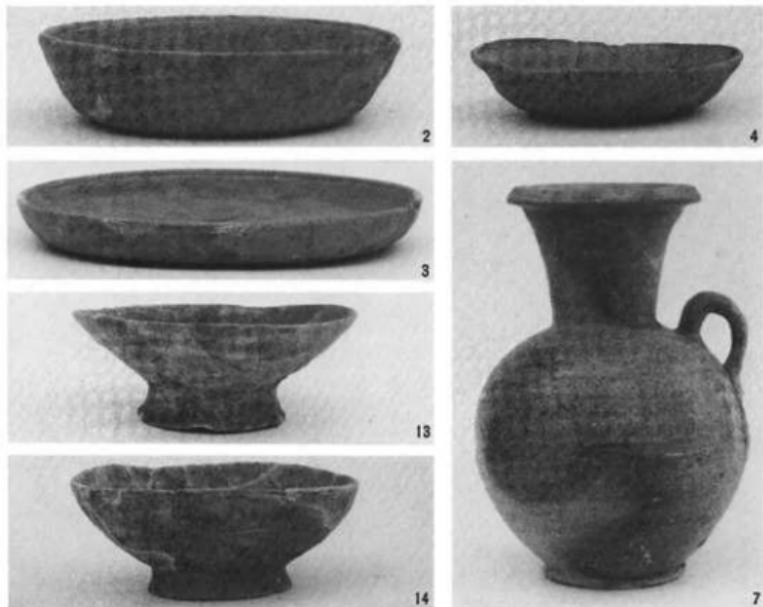
fig.27 S B2940・S K2945・S B2943出土土器実測図 (1 : 4)

須恵器杯 (fig. 27) は、(12)が口径13.4cm、器高3.6cm。(13)が口径14.8cm、器高12.8cmでやや浅く、底部はヘラ切り未調整である。

S K2951出土土器は平安時代前期の中でも終わりに近い10世紀前後の土器と考えているものである。土師器杯 (4) は、口縁のヨコナデされる部分の外反度が弱く、(5) のような大形で深いタイプの杯や、(6) のような製塙土器が多く見られるのもこの時期の特徴である。(7) は口縁部を欠くものは完存する環状把手付壺で、外面全面に灰釉がハケ塗りされている。

S D2949出土土器は、斎宮における土師器編年中の平安時代後期 S E2000出土土器に相当するものと思われ、土師器杯・皿・台付碗などがある。ただ(14)の皿は、S E2000出土の皿に比べ口径がやや大きく、またロクロ土師器も見られないところから S E2000出土土器よりやや古手の感がある。

S K2962出土土器 (fig. 29-15~19) は口径9cm前後の土師器小皿のみであり、土塙墓に供献された一括土器と考えられる。器壁は1.5mm~4mmと薄く仕上げられ焼成は比較的堅緻で胎土も良好である。平安時代末期の小皿から鎌倉時代初期の小皿に変化する過渡的なタイプの皿と考えられ、時期的に12世紀末頃のものと思われる。



S K2946・S D2949

fig.28 S K2946・S D2949・S K2951出土土器

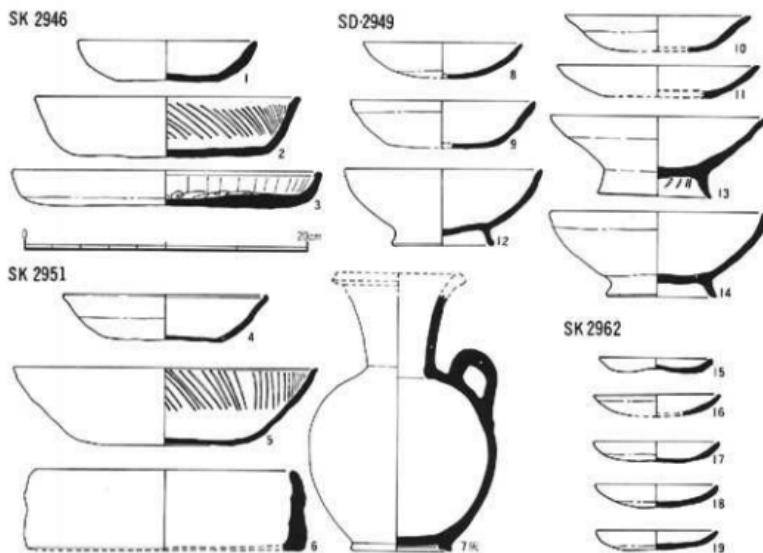


fig.29 SK2946・SK2951・SD2949・SK2962出土土器実測図(1:4)

このほか図示し得なかつたが、椀、皿、段皿、鉢、香炉の蓋といった縁軸陶器片も出土している。

## IV 第48-13次調査

昭和53年に新築された校舎が、西側へ増築されることになったために実施したものである。調査区は第15次調査区の西側、幅14m、長さ60mの約850m<sup>2</sup>におよぶ。これまでにプールのあった所を横切る形で、西方の細部分にまでのびる。プールの基礎部分を重機によって除去したあと調査をはじめた。調査期間は昭和59年2月20日より3月31日までである。

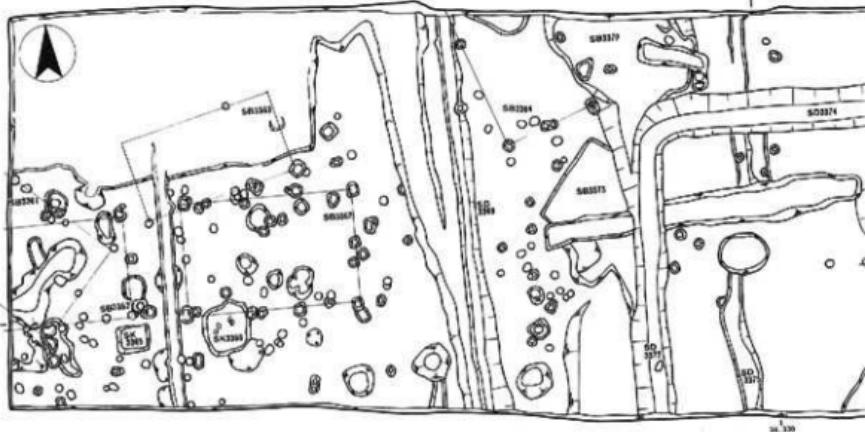
調査地は標高13.2mの平坦で、地山まで40cm程である。茶褐色土が20cm~30cmあり、その下層に暗茶褐色、黒褐色の遺物包含層がある。奈良時代の遺構には黒褐色土が、平安時代以降の遺構には暗茶褐色土が埋っている。

プールのコンクリート基礎や排水溝および以前の学校建設により、遺構面が部分的に破壊されている個所があった。

### 1) 奈良時代の遺構

竪穴住居7、掘立柱建物2、土塙3、溝2がある。

前期のものには竪穴住居SB3381・SB3391がある。調査区中央にあるSB3381は、4.1m×3.2m、深さ26cmの方形のもので、柱穴・カマドではなく東側はSB3383に削平されている。ここからは、土師器甕・杯・皿、須恵器鉢などが出土している。調査区北東隅にあるSB3391は径2.3m×2.1m、深さ15cmで今回検出した竪穴住居の中で最も小さく西側はSB3390に削平



されている。

中期のものには、一辺 3.0 m 程度の方形の竪穴住居 S B 3373・S B 3383・S B 3385・S B 3390と、一辺 4 m の隅丸長方形の竪穴住居 S B 3370がある。S B 3373は、S D 3372と旧プール基礎によって削平され遺物の出土もほとんどなかった。S B 3383は S B 3381と、S B 3390は S B 3391とそれぞれ同規模の建物と重複しており、建て替えと考えられる。S B 3383はさらに S X 3380とも重複しているもので、東壁の南寄りの個所にカマドを設けておりその中から土師器 裝・杯が完形で出土している。また、S B 3370・S B 3385の東壁にも焼土の散布が見られた。S B 3385は北に対して 7°西に偏り、他の 4 棟は 30°西へ偏る建物である。その他同時期のものに土塙 S K 3378と溝 S D 3377がある。

後期に入ると竪穴住居はなくなり、掘立柱建物が出現する。S B 3363は北側が粘土取りによる削平で柱穴が不明のものもあるが桁行 5.6 m・梁行 3 m で西へ 15° 偏る 3 間 × 2 間の東西棟の建物である。柱掘形の形状、大きさは不揃いで、柱間も一定していない。調査区東南隅にある東西棟の S B 3379は北側が削平されているため不明確であるが 3 間 × 2 間と考えられ、柱間は 桁行 1.6 m、梁行 1.5 m、柱掘形が一辺 50 cm の方形を呈し、柱掘形内に柱痕跡が認められる。

その他に、奈良時代に属する南北に走る溝 S D 3386と土塙 S K 3371があるが、明確な時期は不明である。

## 2) 平安時代の遺構

掘立柱建物 1、土塙墓 1、土塙 3、溝 6 がある。

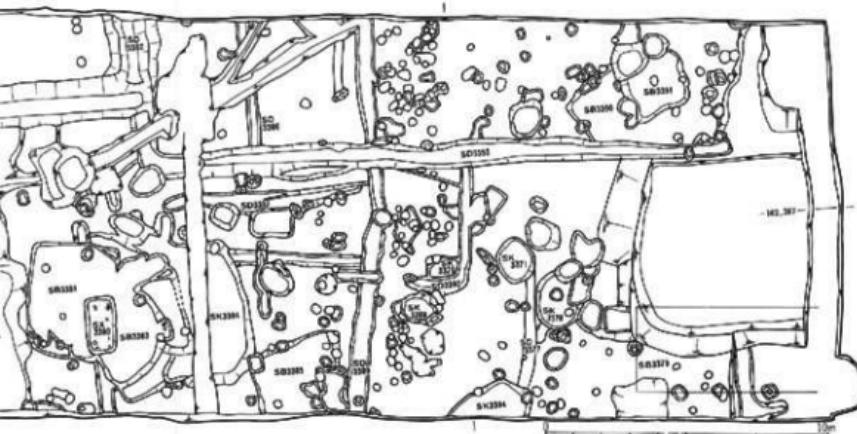


fig. 30 第48-13次遺構実測図 (1 : 200)



fig31 第48-13次全景（西から）

平安時代初期の遺構はなく、前期に入っても掘立柱建物1、土塙1と少ない。掘立柱建物S B3367は、3間×2間のほぼ方位にのる東西棟の建物で桁行6m、梁行4mである。柱掘形は一辺40cm前後の方形を呈するが柱間は一定していない。この建物に重複する土塙S K3368は一辺1.5mの方形の浅いもので、底に20cm前後の石が置かれていた。ここからは、斎宮跡の土師器編年でのS K2650に相当する土師器杯が出土している。S B3367とS K3368の新旧関係は、埋土の切り合いでS K3368の方が古いことがわかる。

後期の遺構は土塙S K3388だけであり、径1m×1.8mの不定形で深さ50cmの深いものであるが、遺物の出土は少なかった。

末期の遺構には、建物ではなく、土塙墓S X3380、土塙S K3376、溝S D3374・S D3382・S D3387・S D3389・S D3392・S D3393がある。調査区中央にあるS X3380はS B3381とS B3383の切り合っている中にあり、プールの浅い基礎の下から確認された。長軸はほぼ方位にのっている。掘形は2.1m×1.1m、深さ30cmで長さは不明確であるが幅55cmの木棺の痕跡も認められた。遺物は、土師器杯・皿と共に木棺に使用した釘などが出土している。東西に走るS D3374は、長さ14m、幅1.6m、深さ46cmで溝底は平坦である。溝の西部分は当初はS D3372とT字状に交わるものと確認したが、掘り下げた結果溝底はL字状に曲がっており、S D3372とS D3374はつながっていたと考えられる。S D3382は、幅1.4m、深さ45cmの二段の溝でS D3374と交わり、埋土の切り合いでS D3374より新しい。S D3393は、北方へL字状に曲がる幅1mの溝で北側はS D3374と交わる。溝の西側で深さ13cmの浅い溝から深さ31cmの逆台形状の溝に変化するが、その部分を排水管の溝で破壊しているため不明確である。底は平坦で西

と東で落差が35cmあるため西から東に流れたものと考えられる。

### 3) 鎌倉時代の遺構

この時期の遺構は少なく土塙2があるのみである。土塙S K3365は一辺1m、深さ20cmのほぼ正方形のもので、土師器鍋・杯が少量出土しており、鎌倉時代前期に属する。

もう一つの土塙S K3384は、長辺5m、深さ10cmの南北に長く浅いもので主軸はほぼ真北に向いている。鎌倉時代後期の土師器片が出土している。西側は排水管の溝や旧プールの基礎で破壊されており不明瞭である。

### 4) 室町時代の遺構

この時期の遺構には、南北に走る溝S D3369・S D3372・S D3375がある。S D3369は、幅0.7m~1m、深さ40cmの溝で畠の側溝

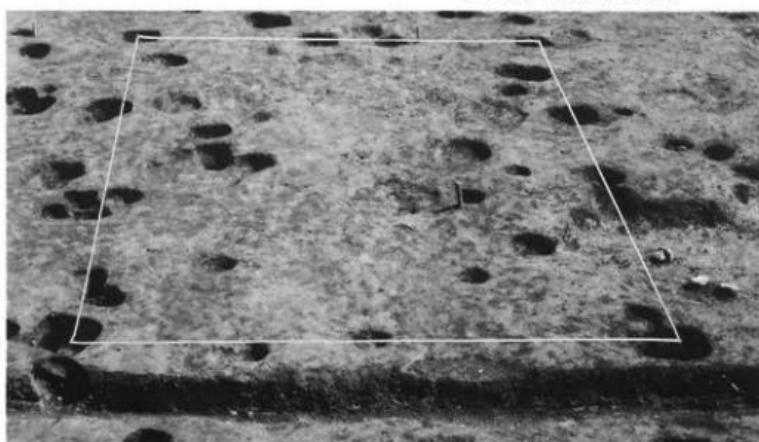


fig.32 全景・S B3381・S B3383・S B3367



fig33 S X 3380 (北から)

る。柱間は桁行2.1m、梁行1.8mで梁行の柱振形が一辺40cmの方形のものに対して桁行は径15cm～20cmの円形の小さいものである。SB3364は、柱間が桁行1.8m、梁行1.7mの北に対して西へ22°偏る南北棟と考えられる。

## 5) 遺 物

全体的に遺物の出土量が少なく、奈良時代の遺物がほとんどである。遺物は、土塙墓S X 3380から出土した釘の他は土器であり、しかも破片で完形になるものは少ない。

SB3381・SB3391 (fig. 35) の遺物は奈良時代前期に比定するものである。甕 (1・2・7) は、口縁部がゆるく外反し、中央が肥厚して、端部はつまみ上げて丸い。口縁部はヨコナデ、胴部外面は縦のハケメ、内面は粗い横のハケメを施している。椀 (4・5) は、口径11cm程で口縁部がヨコナデ、底部が指による押えで平坦でいわゆるいなか風の土器といわれるものである。台付杯 (8) は、口径24cmの大形品で口縁が肥厚し、体部外面がヘラ研磨で、内面はハケメが施されたままである。皿 (3) は、口径24cm、器高2.8cmで、底部はヘラケズリされている。須恵器鉢 (6) は、口径39.7cm、器高8cmで体部下部をヘラケズリしている。

奈良時代中期の遺物としてSB3370・SB3383・SB3385から出土した土器 (fig.36-37) がある。甕は口径11cm～16cmの小形品 (fig.36-5・6・13, fig.37-1・2・3) があり、口縁部が短く、強く外反するものもある。口径20cm以上の甕は、口縁部より肩部が張り出して胴部が球形もしくは梢円形になるもの (fig.36-1・2・4・12) と肩部が張り出さずに直下するもの (fig.36-3・11) がある。胴部の調整は外面が縦方向のハケメで、内面が横方向のハケメ

に沿って走っている。SD3372は幅1.4m、深さ35cmで、SB3370を削平して直進する溝と考えられたが、溝底では、SD3374へL字状に曲がることを認められることから、平安時代末期のL字状に曲がる溝の上に重なるようすに室町時代に溝が設けられたものと思われる。SD3367とSD3372は平行して南北に走っており道路の側溝とも考えられる。

これらその他に時期不明の遺構に掘立柱建物SB3361・SB3362・SB3364がある。SB3361は、梁行3.85mの東西棟の建物で北に対して西へ50°偏る。柱振形は円形の小さいものの柱間は不揃いである。SB3362は東西棟である。

SB3364は、柱間が桁行1.8m、梁行1.7mの北に対して西へ22°偏る南北棟と考えられる。

だけのものと、下半部をヘラケズリしているものがある。鍋 (fig.36-15, fig.37-4・5) は、口径30cm前後で、口縁部の形態、調整は先述の甕と同じである。瓶 (fig.37-6) は、まっすぐ口縁まで直立するもので把手が付き、調整は甕と同じである。杯は、口縁部がゆるく外方へ立ちあがり、口縁部ヨコナデ、底部を指による押えのもの (fig.36-7・17・18) と、口縁部が上方へ立ちあがり、底部をヘラケズリしている赤褐色を呈するもの (fig.36-16・19) がある。

また、内面に横の粗いハケメ (fig.36-16) や、放射状の暗文 (fig.36-8) を施しているものもある。皿は、底部をヘラケズリしているもの (fig.36-20・21) と内面に放射状の暗文があり外面をヘラ研磨しているもの (fig.36-9) がある。S B 3385からは須恵器杯・蓋が出土している。杯 (fig.37-8～10) は口縁部が直立する浅いものと、口縁部が外方に開くものとがある。蓋 (fig.37-12・13) は丸い



14



19



fig.34 S B 3381・S B 3383出土土器

SB 3381

3 S B 3383

18

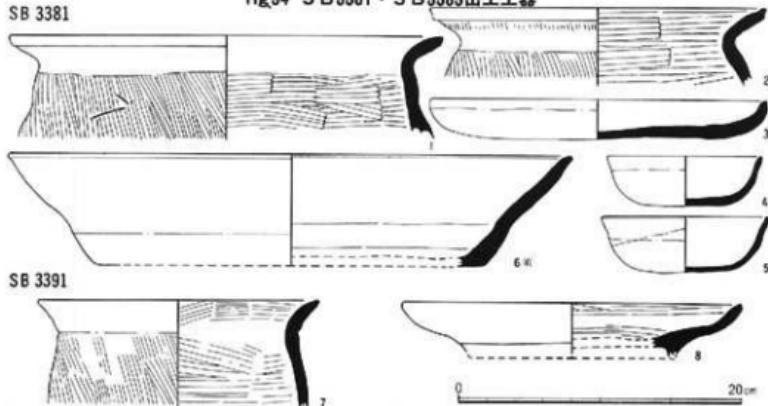
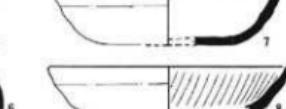
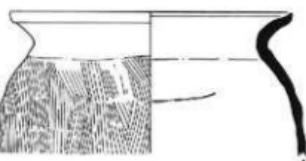
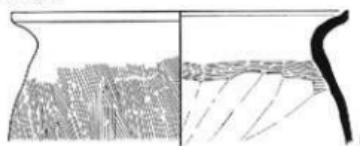


fig.35 S B 3381・S B 3391出土土器実測図 (1 : 4)

SB 3370



SB 3383

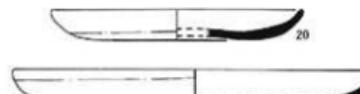
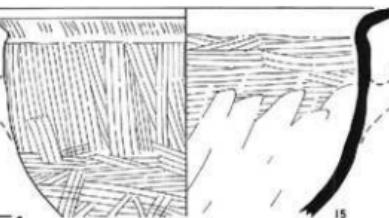
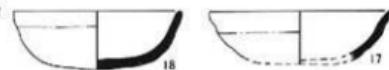
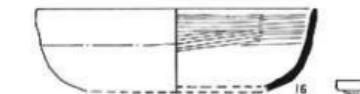
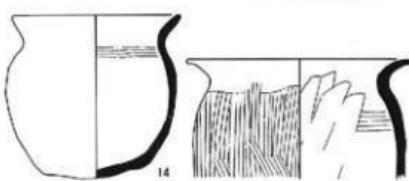
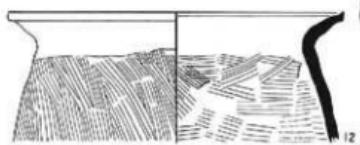
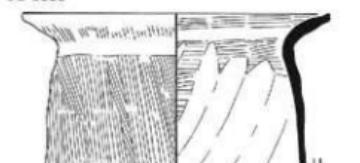


fig.36 SB 3370・SB 3383出土土器実測図 (1 : 4)

SB 3385

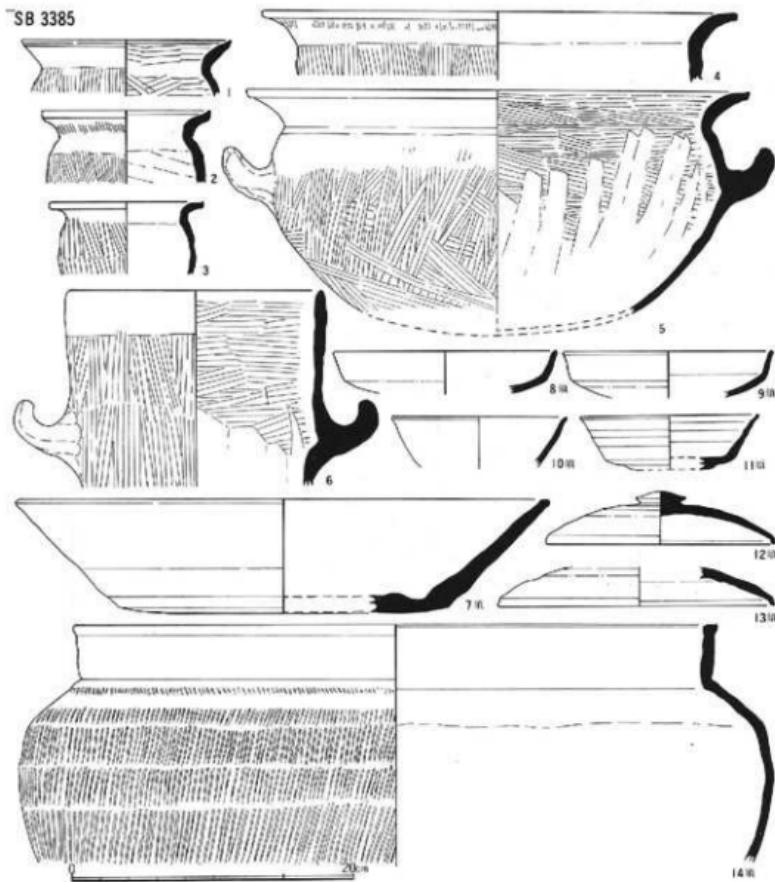


fig.37 SB 3385出土土器実測図 (1 : 4)

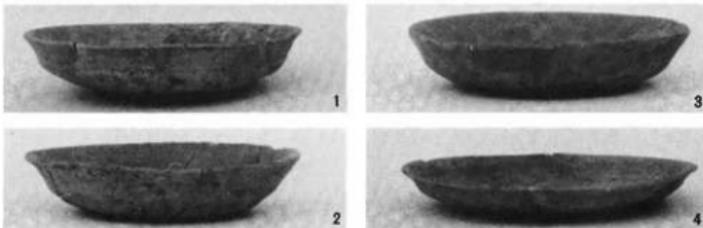


fig.38 SK 3368出土土器



fig.39 S K3368・S K3388・S X3380出土土器実測図 (1:4)



fig.40 S X3380出土土器

天井部に平坦なつまみがつくもので、天井部はヘラケズリされる。甌 (fig.37-14) は、口径 45.5cm の大形品で口縁部は直立し、端部は平坦に仕上げられる。体部外面はタタキ目、内面はタタキ目のあとナデにより消している。

平安時代の遺物は非常に少ない。SK 3368からは、土師器杯 (fig.39-1~4・6・7) と皿 (fig.39-5) が出土している。いずれも口径 15cm 前後で口縁部はゆるく外反し、ヨコナデ調整で、底部外面は指による押えである。

S X3380は平安時代末期に比定される土塙墓で土師器杯・皿と釘の他は出土していない。杯 (fig.39-15・16) は、口縁部が内寄ぎみに立ちあがり、底部は指による押えで、凹凸がはげしい。皿 (fig.39-11~14) は口径 9cm、器高 1.5cm 前後の浅いものである。この時期の土器は、胎土がわるく、形もひずみ雑なつくりである。

## V 第53-1次調査

現在の校舎の西南側に新しく体育館を建設することになり、その事前の発掘調査である。第48-8次調査地のすぐ東側で、これまで畠であったところである。新しく建設する校舎との渡り廊下部分を含めて約1250m<sup>2</sup>を昭和59年3月27日より5月9日まで実施した。

第48-8次調査では奈良時代の土塙、鎌倉時代以降の土塙、井戸、溝などが検出されており、SK3320からは奈良時代中期の良好な一括資料が出土している。しかし、大半は鎌倉時代以降で、集落の周辺、参宮街道へ近づくにつれ、中近世のものが多くなる傾向が認められた。

調査区は30m×40mで、僅かに西へ傾斜しており、地表面の標高は12.6m～13m前後である。遺物包含層は暗褐色土で、20cm足らずの厚さである。予想に反し、調査区南側部分にまで奈良時代の竪穴住居や土塙が検出されている。また、中央東寄りの個所には径5m×3mの防空壕痕が2ヶ所確認された。



fig.41 第53-1次全景（上：北から・下：西から）

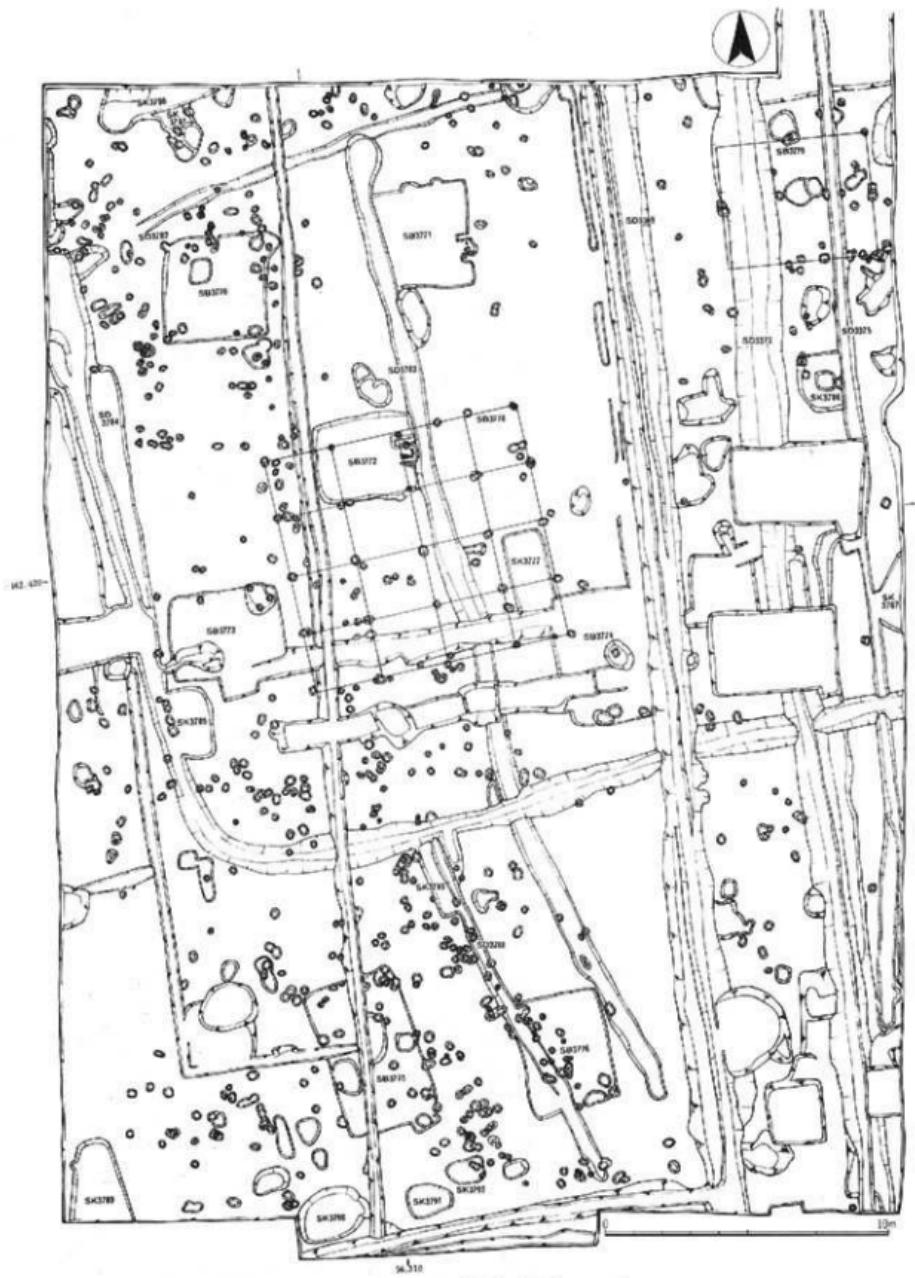


fig.42 第53—1次遺構実測図（1：200）

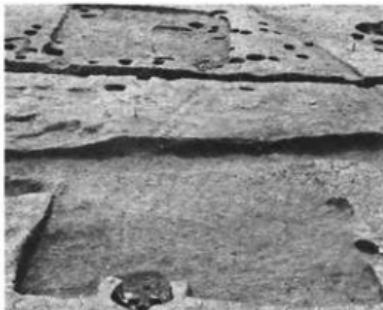
### 1) 奈良時代の遺構

竪穴住居7、土塙6、溝1がある。

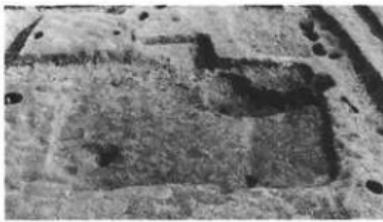
前期の遺構は竪穴住居2（S B3771・S B3774）がある。調査区北側にあるS B3771は、西側をS D3783に削平されており、一辺3.7m、深さ21cmで、東壁にカマドが設けられている。S B3774は、畑の側溝で削平され、一辺4.8m、深さ16cmの方形のものでカマド、柱穴は認められない。

中期の遺構は、竪穴住居5（S B3770・S B3772・S B3773・S B3775・S B3776）土塙4（S K3789・S K3790・S K3791・S K3792）がある。この時期の遺構は調査区の中央から西側に点在し重複するものはない。S B3770は3.8m×3.7mで、北壁中央にカマドを設け、柱穴も認められる。S B3772は3.8m×3.0m、深さ22cmで東壁中央にカマドを設け、柱穴はない。S B3773の南側は粘土取りの削平を受けているが、規模は4.1m×3.2mで北壁中央に焼土の散布が見られた。ここから出土した遺物の中には前期のものも混っていた。調査区南側にあるS B3775は、5.6m×3.5m、深さ12cmの長方形の建物で、東壁に焼土の散布が認められた。この建物から東4mにあるS B3776は4.2m×3.1m、深さ10cmでS D3788に削平され、カマド、柱穴はない。調査区北側のS B3770・S B3772・S B3773が等間隔に建ち並び、正方形もしくは東西に長い同規模の建物であるか、南側のS B3775・S B3776は、南北に長く、西に偏くものであり、2群に別けることができる。

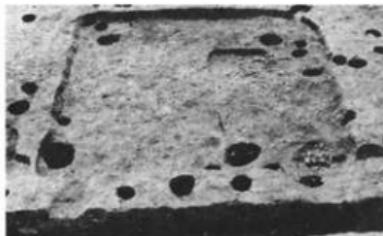
土塙は調査区の南側にあり、重複するもの



S B3770・S B3771 (東から)



S B3773 (北から)

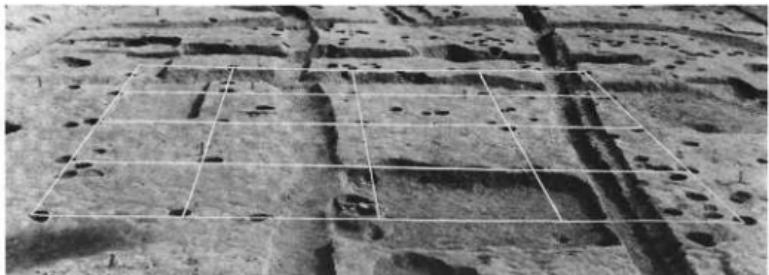


S B3770 (東から)

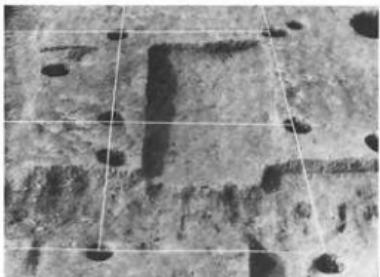


S B3772 (北から)

fig.43 S B3770・S B3771・S B3773・  
S B3772



S B3778 (北から)



S K3777 (南から)



S D3372・S D3369 (北から)

fig.44 S B3778・S K3777・S D3372・S D3369

はない。S K3789は、南が未調査のため形態は不明であるが、南北に長い台形状と考えられ、短辺1.2m、深さ23cmである。S K3790は2.7m×1.9m、深さ27cmの楕円形である。S K3791・S K3792は一辺1.4m程の不定形な土塙で、深さ10cmと浅い。

奈良時代後期の遺構はない。その他、奈良時代ではあるが、遺物の出土量が少ないため識別不可能なものに土塙S K3787、溝S D3788がある。しかしS D3788は竪穴住居S B3776より新しいため、中期もしくは後期のものと考えられる。

## 2) 平安時代の遺構

掘立柱建物2、土塙5、溝3がある。

平安時代初期と中期の遺構はない。前期の遺構として土塙S K3781・S K3786がある。S K3781は、S K3780に削平された不定形な土塙で、黒窯90号窯期の新しい時期に相当する遺物が出土している。S K3786は、長辺が2.1mの方形の浅い土塙で東側はS D3375に削平されている。

後期の遺構としては溝S D3782・S D3783がある。S D3783は、全長35.5m、幅1.3mの南北に走る溝で、北はS D3782とT字状に交わる。溝底の南北の高低差は40cmあり、南から北へ

流れていたと考えられる。S D 3782は、埋土の切り合ひから S D 3783より新しく、幅40cm~50cmの浅い東西に走る溝である。

末期の遺構は、掘立柱建物 S B 3778・S B 3779、土塙 S K 3777・S K 3780・S K 3785、溝 S D 3784がある。

S B 3778は、4間×4間の総柱の建物で南東隅に土塙 S K 3777を伴う。桁行9.3m、梁行8.4mの東西棟で、桁行の柱間は2.4mであるが東側のみ2.1mと狭い。柱掘形は径30cmで挙大の石をするものも認められた。S K 3777は、南北を長辺に幅1.5m、深さ19cmで南は削平されているが、S B 3778の南東隅1間×2間の中に納まる。

調査区北東にある掘立柱建物 S B 3779は、桁行5.2m、梁行4.2mの2間×2間の建物であるが、北は旧プールで削平され、西は未調査のため不明であり、S B 3778のような規模の総柱建物の一部とも考えられる。

溝 S D 3784は、幅1m~1.2mで北から西にL字状に曲がり、逆台形状を呈している。この溝から南北・東西にそれぞれ5m内側に掘立柱建物 S B 3778があり、溝と建物の方向も一致することから、区画する溝と考えられる。

S K 3785は、S D 3784を削平する2.5m×1.5mの長方形の土塙である。

### 3) 室町時代の遺構

溝 S D 3369・S D 3372・S D 3375がある。3条の溝は、南北に走るもので、第48-13次調査で検出した溝につながる。S D 3369とS D 3372は平行して走っており、道路の側溝とも考えられる。

### 4) 遺 物

遺物の出土量は、包含層、遺構共に少なく、ほとんどが破片で、完形になるものは、杯、蓋、楕などの小形のものである。

奈良時代の遺物は、ほとんどが竪穴住居からの出土で、S B 3771・S B 3774 (fig.45) は、前期に比定されるものである。甕、鍋の口縁部の形態や調整は同じで、口縁部がゆるく外反して端部をつまみ上げているもの(4・6・7)と口縁が強く外反するもの(1・2・8)がある。胴部外面は、縱方向のハケメ、内面は横方向のハケメを施し、下半部をヘラケズリしているものもある。(1・2)の内面はナデで、(6)はヘラケズリである。甕(9)は、口縁端部に段を有するもので、調整は甕と同じである。杯(3・10・11)は、口縁部が内凹ぎみに立ち上がり、端部は丸く、口縁部がヨコナデ、下半部が指による押えで調整している。須恵器杯(5・12)は、口縁部が外方に立ち上がり、端部は小さく外反するもので、(5)はヘラケズリのあとに外方にふ

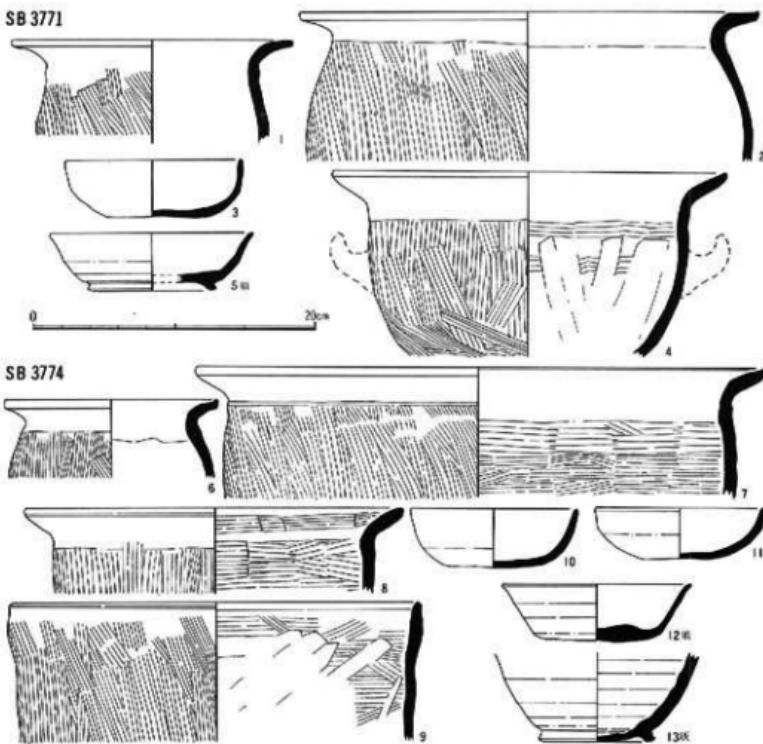


fig.45 SB 3771・SB 3774出土土器実測図 (1:4)

んばる高台をつけており、12はヘラケズリのままである。灰釉陶器壺（13）は、下半部のみ残存し、高台の付くもので、外面はヘラケズリし、一部に釉が付着しており、胎土・色調から平安前期のものと考えられ混入したものであろう。

中期のまとまった遺物は、SB 3770・SB 3772・SB 3775・SB 3776 (fig.47) から出土している。壺は、ゆるく外反する口縁部の中央が肥厚し、端部をつまみ上げて丸く、口径15cm前後の小形品（8・10）と20cm以上の大形品（1～5）とがあり、外面は継のハケメ、内面は横の粗いハケメで、下半部をヘラケズリしたもの（8）もある。壺（6）は口径28.5cmの大形品で、調整法は甕と同様である。杯は、赤褐色で、下半部をヘラケズリしたもの（9・14）と、乳茶褐色で、下半部を指押えしたものの（12）がある。土師器壺（11）は、口径17.2cm、器高29cmで、ヘラケズリした平坦な天井部に中央がわずかにふくらむ扁平なつまみが付く。須恵器蓋は、口径14cmの小形品（13）と、18cm以上の大形品（7・15）があり、ヘラケズリされた天井部に

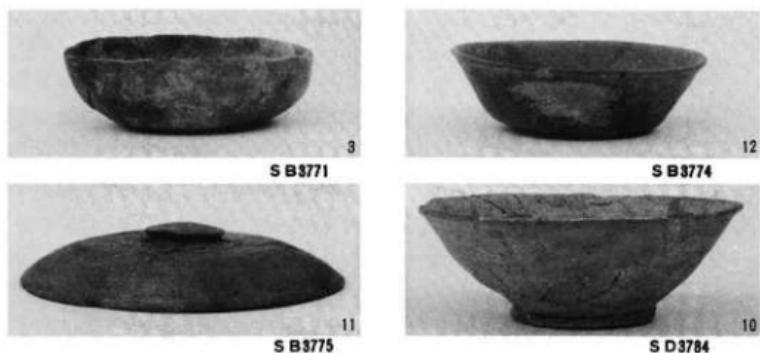


fig.46 S B3771・S B3774・S B3775・S D3784出土土器

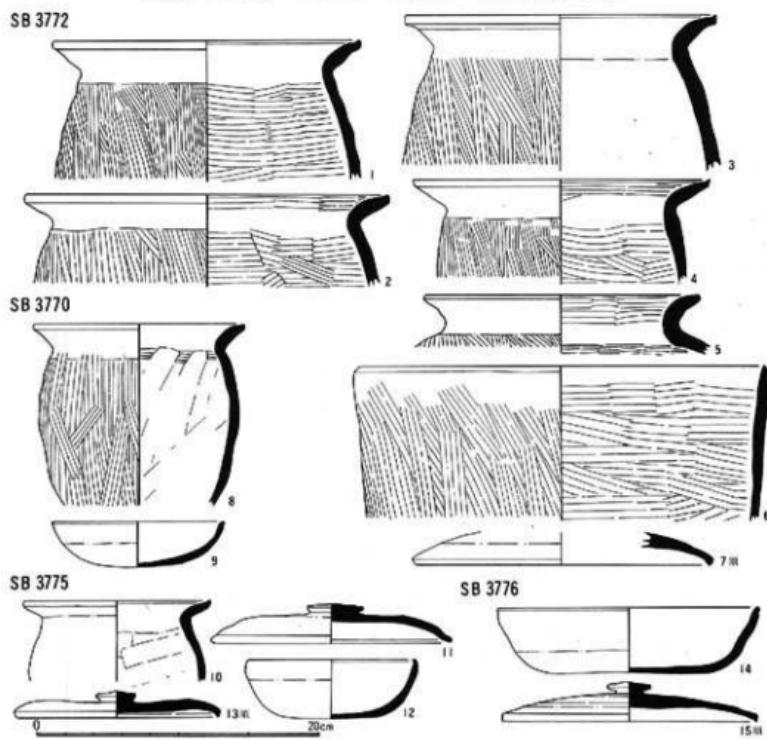


fig.47 S B3772・S B3770・S B3775・S B3776出土土器実測図 (1 : 4)

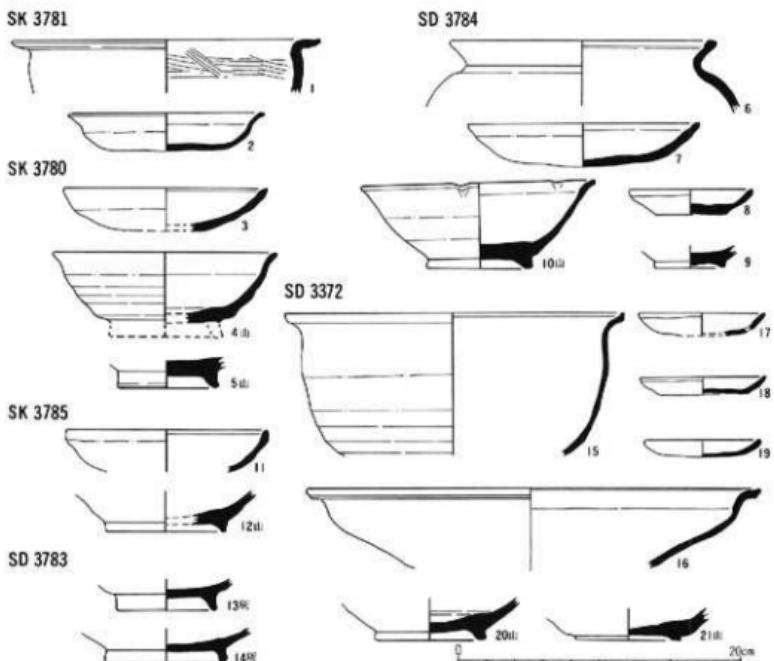


fig.48 SK 3781・SK 3780・SD 3784・SK 3785・SD 3783・SD 3372  
出土土器実測図 (1:4)

中央がふくらむつまみが付き、口縁端部は直下する。

平安時代の遺物は少なく、SK 3781(fig.48)の土師器甕は、口縁部が直角ぎみに強く外反するもので、外面はナデ。内面は横の粗いハケメ調整である。杯は、口径13.9cm、器高2.7cmの口縁が外反するもので黒雀90号窯期の新しい時期に相当するものである。

SD 3783は後期に比定されるもので、灰釉陶器椀は、高台の断面が三日月に近いもので端部が肥厚して丸いもの(14)と、底部に糸切り痕を残すもの(13)があり、ともに内面に重ね焼きのあとがある。

末期に比定されるものは、SK 3780・SK 3785・SD 3784 (fig.48)である。土師器杯(3・7・11)は、口縁部がゆるく外方に立ち上がり、端部が肥厚して丸く、胎土は砂粒を含み粗雑である。山茶椀(10)は、4ヶ所に輪花を施し、口縁部にツケガケされた灰釉がある。

SD 3372 (fig.48)は室町時代のもので、土師器鍋は、器厚が薄く、口縁部が受口状で口縁内部が段状になり、深くて体部下半をヘラケズリしているもの(15)と、浅いもの(16)がある。土師器小皿は、口径8cm、器高1cm程の薄く浅いもので、底部に径3mmの円形の穴をあけてあるもの(7)もある。山茶椀は、底部のみ残存しており、高台も低くモミガラ痕が付いている。

## VI 第53-14次調査

現在の講堂の西側に建っていた体育道具保管小屋が、新しく建設する体育館の使用に際し、別の個所へ移転することになった。新しく移転する場所は学校の北西隅部分で、近鉄線のすぐ脇である。 $8\text{ m} \times 6.2\text{ m}$ の $50\text{m}^2$ 足らずの小範囲を昭和60年2月22日より12日間にわたって実施した。

### 1) 奈良時代の遺構

土塙 S K3804・S K3807・S K3808、溝 S D3802があり、竪穴住居や掘立柱建物はない。S K3804は調査区北端にあり、未調査区に広がるため全容は不明である。S K3807は $1.6\text{ m} \times 1.1\text{ m}$ 、深さ20cmで、S K3808は $1.2\text{ m} \times 1.0\text{ m}$ 、深さ15cmでともに楕円形の土塙である。溝 S D3802は、幅75cm、深さ19cmで浅く、北に対して東に50°偏って走るもので、S K3803・S K3804に削平されているが、土師器甕・皿、須恵器長頸壺、布目瓦などが出土し、中期に比定される。

### 2) 平安時代の遺構

溝 S D3801、土塙 S K3803・S K3805・S K3806があり掘立柱建物はなく、すべて末期のも



fig.49 第53-14次全景（東から）

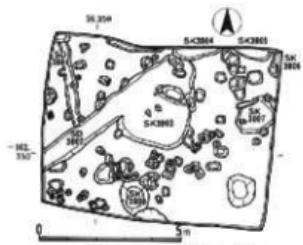


fig 50 第53-14次発掘実測図  
(1 : 200)

のである。S D 3801は、幅40cm、深さ8cmの北へ延びるもので、南はS D 3802と重複し、それ以上延びない。S K 3803は、2.4m×1.8m、深さ26cmの東西に長い楕円形で、中央に30cm程の石があり、埋土にも拳大の石が多く混っていた。遺物は、土師器皿・皿、山茶碗、山皿など多数出土している。調査区北東端にあるSK 3805・SK 3806は、未調査地区に広がるため全容は不明である。

### 3) 遺 物

遺物は、小範囲の調査ではあったが、整理箱に2箱分の土器が出土。時期的には奈良時代と平安時代末期のものに限られる。

奈良時代の溝S D 3802 (fig 51) から出土した土師器甌 (1) は、口径16cmで口縁部はゆるく外反し、端部は肥厚して丸い。胴部外面は、縦方向のハケメを施し、内面も横方向に細かいハケメを施す。土師器皿 (2) は、赤褐色で、口縁部は内弯気味に立ち上がり、底部はていねいになじて平坦に仕上げ、底部外面にヘラによる2本の平行線が描かれている。長頸壺 (3) は、頸部のみ残存するもので、ゆるく外反する頸部中央に沈線が2本あり、口縁は強く外反して端部はつまみ上げ自然釉が付着している。

調査区中央部で検出した土塗SK 3803 (fig 51) からは平安時代末期の土器がまとめて出土している。土師器皿 (4~8) は、口径15cm前後で比較的薄手の平坦な底部に内弯気味に立ち上がる口縁部がつく。口縁部中ほどがやや肥厚し、端部は8mmほど強くヨコナデされる。胎土、SD 3802

SK 3803

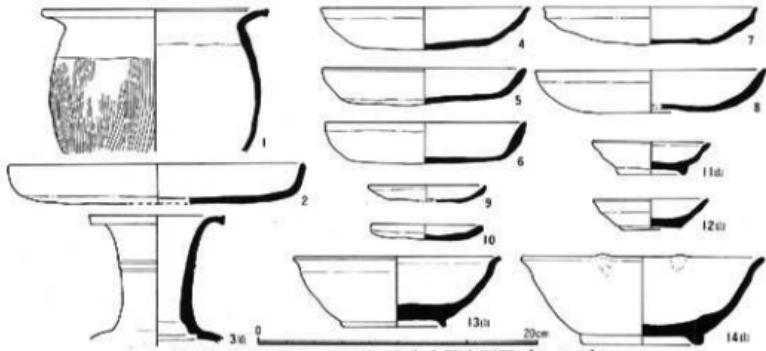


fig 51 S D 3802・SK 3803出土土器実測図 (1 : 4)

焼成共に前代のものに比べ良好である。土師器小皿（9、10）は口径8cm前後で、胎土、焼成、調整法は皿と同じである。山茶椀は、内窓気味に開く体部、外反する口縁部から成り、少しいびつな円形の低い高台が底部に付く。(13)は、口径14.8cm。底部内面が平滑であるところから、硯に転用したものかもしれない。(14)は、口径17cm。指でつまんだ輪花を配す。山皿は、口径8cm前後で高台が付くもの(11)と、付かないもの(12)がある。(11)の内面には茶褐色の漆が付着している。

S K3803出土の山茶椀、山皿は藤澤編年の三段階第5型式に相当するものと思われ、また土師器皿は、形態や調整法において斎宮跡出土土師器編年のS D3052出土皿とS X2990出土皿との中間的なタイプである。従ってS K3803出土土器を12世紀末の一群ととらえておきたい。

## VII 結 語

斎宮小学校校舎、体育館、プール等の施設建設に伴う事前の発掘調査であった。調査面積は約4300m<sup>2</sup>におよび、近鉄線の南側、參宮街道沿いの住宅密集地区においては広範囲な調査となつた。昭和52年の四脚門を検出した第15次調査より既に8年が過ぎ、その間、斎宮跡の発掘調査面積も当時の3倍にもなり、斎宮跡の様子も次第に明らかになりつつある。計画的な造営をうかがわせる区画溝や、600棟をこえる掘立柱建物、中でも典型的な官衙的配置を示す建物群、遺物も3000点以上の綠釉陶器をはじめ、「水司鴨口」ヘラ描き土器など斎宮跡ならではの遺構・遺物の検出があった。これまでの調査により、奈良時代より鎌倉時代まで存続した斎宮跡は、奈良時代には古里地区を中心とする宮城西部に、平安時代初期には宮城中央および東部にうつることが判明しつつある。

### 1) 奈良時代の遺構

当地区の調査においてはまず奈良時代前期、中期の竪穴住居がみられる。すべて方形で一辺4m足らずのものから、一廻り大きい長方形を呈するものまでバラエティーに富む。しかし、同時期の掘立柱建物は無い。掘立柱建物は奈良時代後期にみられるが、この時期には竪穴住居はみあたらない。この様子はこれまで古里地区を含む宮城西部地区の竪穴住居と掘立柱建物の混在する様相と相似るものである。ただ、これまでも述べてきたところであるが、奈良時代の斎宮は宮城西部にひろがっていたと思われ、当地区はその周辺部にあたるとすれば、今回検出した多くの竪穴住居は官衙を構成する役所の一部とは考え難く、斎宮寮の造営などの雑役に携わった人々の住居かもしれない。昭和54年の第27次東裏地区で検出した奈良時代の土器焼成坑の周辺にあった竪穴住居や今回の円形周溝と共に存する竪穴住居はそれらを管理する人々の住居とも考えられる。一方、奈良時代後期には小規模な掘立柱建物が出現し、官衙の一部に組み込まれていったのかもしれない。しかし第32・38・50次調査で検出している奈良時代の掘立柱建物の柱通りの方向は、古里地区より下園地区へと続くSD170の方向に規制された様子を示すが、当地区においてはそのような規制性は認められない。SD170周辺とは別の性格をもつ地区であろうか。

### 2) 平安時代の遺構

続く平安時代になると、初期と考えられる遺構、遺物は皆無といつてもよい状態である。平安時代初期には斎宮寮は東へ移ったと考えている。宮城の中央および東寄りの巣治山、東加座、

西加座などの地区での調査において、幅2m程の逆台形を呈する溝が見つかっている。この溝は区画溝と呼んでいる溝で、一辺120m前後の方方に走り、平安時代初期から中期の土器が出土している。斎宮跡は平安時代初期にこれまでの西部地区より、新しい造営計画のもとに東寄りで整備されたものと思われる。このため、当該地区は一時的に人々が居なくなったものであろう。

平安時代前期の遺構としては、掘立柱建物1と数基の土塙が認められるが、中期になると再び遺構、遺物はみられなくなる。これは当地区に限ることではなく、斎宮跡全体について言えることである。それは、後述するが、いわゆる猿投古窯編年による折戸53号窯式が、当斎宮跡では明確にし得ないことによる。

平安時代後期、末期の遺構密度もあまり高くない。後期には四脚門、築地、掘立柱建物および数条の溝があるにすぎない。しかし、四脚門SB700はこれまでの調査においてはじめての検出であった。掘立柱建物SB2950は南と北に廂をもつ東西棟の建物である。時期的には同じであるが、建物の柱通りの方向が異なる。四脚門はE3°Sであるのに対し、掘立柱建物はE10°Sと大きく南へふれる。このため同時に存在したとは断言できない。この時期の建物は宮城中央部、御館、柳原地区を中心に分布しており、当地区や宮城西部ではあまり見られない。その上、中央部では同じ個所で何度も建て替えられた様相を示すが、当地区ではそのような現象はない。一方、末期の遺構としては掘立柱建物、築地、方形周溝、井戸、溝などがあるが、いずれも後期同様重複が少ない。掘立柱建物は総柱の建物で、当地区の近鉄線を隔てた北側の50次、56次の調査においても見つかっている。この種の建物は西加座や西前沖地区で重複した状態で数多く認められている。平安時代後期、末期は宮城中央部において掘立柱建物が群をなして配置されているのに対し、当地区では重複せずに点在しており、地区により性格が異なるものと思われる。

### 3) 門について

斎宮跡の調査で門が検出された事例はきわめて少なく、ここに報告した第15次調査発見のSB700と、東部の字西加座で実施した第34次調査のSB1867の2例で、いずれも四脚門である。前者は平安時代後期に属し、桁行3.4m、梁行3mの規模であり、四脚門としては比較的小型になろう。後者のSB1867は一時期古い平安時代中期の四脚門で、桁行5.2m、梁行5.4mあり、やや大型のものである。

前者のSB700には2条の東西溝がとりつき築地等が想定されるが、溝の内々幅2.5mからみて築地もさして規模の大きなものではないだろう。このような一定の地域を区画する施設がどのようにひろがるかは、東西に遮断された北と南のいずれがこの地区の内か外かの疑問とともに今後の課題となろう。

#### 4) 総柱建物について

第53-1次調査で検出した掘立柱建物SB3778は4間×4間の総柱建物である。これは柱通りすべてに柱あるいは床束をもつ建物で、これまでの調査で10数棟がみつかっている。また、最近、三重県下の各地の発掘現場においても検出されている。この総柱建物は平安時代末期に出現するもので、宮城中、東部でみつかっている平安時代初期・前期の大形掘立柱建物のように1mを超える柱掘形ではなく、僅か径30~40cmの小さな柱掘形である。そのうえ、SB3778は南東隅部分2間×1間の間に方形の土塙をともなっている。この土塙は廐屋とか台所の部分ではないかと考えられている。これより、一時期古い総柱建物として第50次東裏地区でみつかったSB3085がある。これは南東隅に土塙を伴わないものである。SB3778の次の時期、鎌倉時代前半には柱掘形内に柱の土台石（根石）をもつようになる。さらに時代が下り鎌倉時代後半頃には土塙がみられなくなり、根石のみの総柱建物へと変化していく。この鎌倉時代の建物は第54次西前沖地区で多くみられる。

#### 5) 土器年代について

この報告の中で、遺構、遺物を奈良時代については前・中・後の3期に、平安時代については初・前・中・後・末の5期に区分して記してきた。これは斎宮跡出土の土器区分に従ったものである。斎宮跡から出土する土器は古くは縄文土器、弥生土器が認められ、古墳の周溝などから出土する5世紀末の土器も見られる。奈良時代以前の土器としては、古里地区の豊穴住居SB1615や土塙SK2120などがあり宮城西部で多く見られる。これらは7世紀後半に比定し得る。

今回報告した第15次のSB710やSK705・SX715、第48次のSB2947やSB2952・SB3381・SB3391、第53次のSB3771・SB3774などから出土の土器は斎宮土器編年表の奈良時代前期の様式としたSK3000（第49次）、SB1800（第33次）に相当する。伴出する須恵器もSX715の台付長頭瓶（22）や底部が糸切のままの杯（17）など若干古いものや新しい様相のものも存在するが、ほとんどが高藏寺2号窯期の範疇で把握できるものである。

続く中期とした第48次、53次の多くの豊穴住居から出土の土器は、SK1098（第21-1次）やSK1970（第35次）相当の土器群であり、伴出する須恵器は岩崎25号窯期に相当する。土師器は基本的に前期のものと大差はないが、杯は器高が減じて浅い型態のものが増えてくるようである。

後期とした第48次のSB2944・SB3363・SB3379は、いずれも掘立柱建物の柱掘形から出土した土器のため、細片に過ぎないが、斎宮土器編年表のSK1370（第28次）に相当するものと思われる。これには、鳴海32号窯期の須恵器が伴う。土師器杯は、口縁部が直線的に開き、口

縁端部がやや内側に曲がる。土師器皿は、中期のものに比べ口径が18cm前後と小さくなる。また器面の調整法は、この時期までb手法が主体的である。

平安時代初期の土器は、今回の調査では全く出土していないが、時期的には、SK1445(第29次)に相当するもので、伴出する須恵器は折戸10号窯期に相当する。土師器杯・皿はこの時期から口縁部が強く外反し、さらに端部が上方ないしは内側に曲がるタイプのものが出現していく。また器面の調整も底部をなでつけ、口縁部をヨコナデする手法e手法が主体となる。

前期には、第48次のSK2951・SK3368、第53次のSK3781などの出土土器がある。今回の報告では、一時期として取り上げたが、二時期に細分が可能であり、前者には、黒釜14号窯期の灰釉陶器が、後者には、黒釜90号窯期の灰釉陶器が伴出する。斎宮における標式土器として前者にSK1045(第20次)、SK1425(第29次)、後者にSK3127(第51次)、SK2650(第44次)出土のものがある。

続く中期は、灰釉陶器では折戸53号窯期に相当する時期のものであるが、当地区も含め斎宮全域の中でもこの時期のものは少ない。

後期は、伴出する灰釉陶器により二時期に分かれる。前者は、東山72号窯式に相当する時期のもので斎宮のSE2000(第31-4次)を標式とする。後者は百代寺窯式に相当するものでSK1730(第32次)、SK1074(第20次)を標式とする。そしていわゆる、ロクロ土師器とか糸切り土師器と呼ばれる一群が出現するのもこの時期からである。今回の調査では、第15次のSD704、SD707などが前者に、SE720などが後者に位置付けられる。

なおSE720出土土器の中には、SE2000で多く見られる非ロクロ製の台付椀(18~21、23)がみられる点で若干古い要素を持っており、一方灰釉陶器はほとんどなく、輪花をもつ山茶椀が主体となっている点では新しい様相を見せているが、土師器表の器面外面のハケメが完全に消失している点、土師器杯、皿類の形態、胎土などからおおむね百代寺窯期の範疇で把握されるよう。

末期は、藤澤氏の瀬戸窯山茶椀編年のII段階第4型式に相当する山茶椀を伴出し、斎宮では、SD3052(第50次)を標式とする。この時期は底部直下で糸切りする土師器小皿が最も盛行し、杯は底部に比べて口縁部の器壁が肥厚し、口縁端部が強くヨコナデされて断面が三角形になるタイプのものが主体となる。第15次のSD711、第48次のSK2962はこの時期のものに含めていいが、土師器は、山茶椀のIII段階第5型式に相当する土師器に近いものである。

#### (付) 学校施設建設にともなう遺構の保存

斎宮小学校現状変更によって、検出された遺構の保存については、先に報告した、昭和53年度校舎新築に先行する発掘調査によって検出された、四脚門の保存が最初である。

この年は史跡指定以前であったが、昭和48年以来、県教育委員会によって進められた斎宮跡範囲確認調査によって、松阪市境に近い西の龍川から、東では中町裏の通称エンマ川までをふくむ範囲に斎宮跡が所在したことが、ほぼ決定づけられていた。このような状況のなかでおこなわれた第15次調査で検出された各種の遺構は、当然斎宮にかかる諸遺構であることは言うにおよばず、なかでも境界をしめす築地等が予想される2条の溝を東西にともなうところの四脚門の検出こそは、画期的な発見であった。

すでに校舎建築の実施設計がなされた後ではあったが、遺構の重要性から、文化庁記念物課とも充分協議した結果、四脚門を校舎床下に現状保存することが関係者の間で基本的に合意された。

その後、具体的な保存工法について検討を加えたが、予定された建物が鉄筋3階建の校舎で

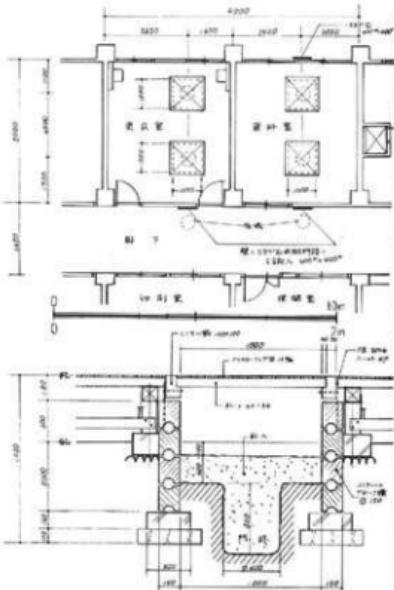


fig52 四脚門保存工法図

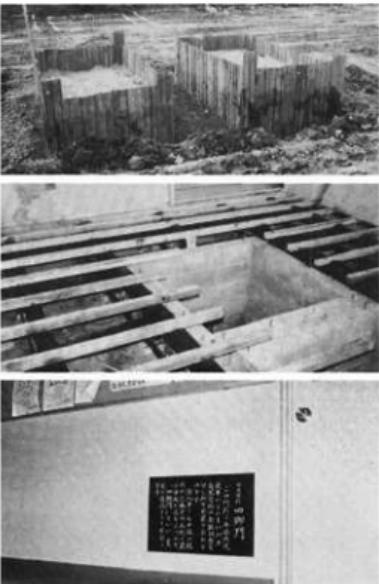


fig53 四脚門保存狀況

その構造上、また廊下や部屋割についてもすでに設計が完成した後であったため、四脚門にかかる6本の柱掘形すべてを床下にとりこむことは不可能となり、主柱と北側の控柱の4ヶ所の柱掘形だけが、保存可能という結論に達した。

基礎工事にあたって、表土から深さ約1.5m掘り下げられたが、四脚門については鋼矢板で、周囲をとりかこみ搬入した砂でおおい、土の崩落をふせぎながらおこなわれた。

このようにして、現校舎内の更衣室と資料室の床面には、一辺1.0mの圓炉裏状の保存設備を施し、必要に応じその保存された柱穴が見られる様になっている。また廊下の壁と近鉄線側の校舎外壁には、黒色御影石による説明板もとりつけられている。

昭和52年以降大規模な現状変更のなかった数年をへて、昭和58年度から、若竹保育園と旧プールの撤去をかわきりに、プールの新設、校舎増築、体育館の新設と大型の現状変更が集中し、それに伴う発掘調査を実施しなければならなかつた。

この間斎宮跡は54年に国史跡に指定され、学校周辺においても面的計画調査、および現状変更緊急調査が実施され、各種の遺構・遺物が発見され、これらとの関連において、学校用地内への遺構のひろがりが注目されたのである。

学校用地内の発掘調査結果は、III~VIに述べたように多大な成果をあげることができた。一方、当然予想される各種遺構の保存方法について、さらに具体的な方法を検討する必要があり、町教育委員会としては、遺跡保存について先行する諸施設の視察をおこなうなかで、大阪府高槻市鳴上郡衙跡内に立地し、検出された遺構を床下に全面保存しながら、校舎を建設した川西小学校をおとずれ、その実情を調査してきたところである。

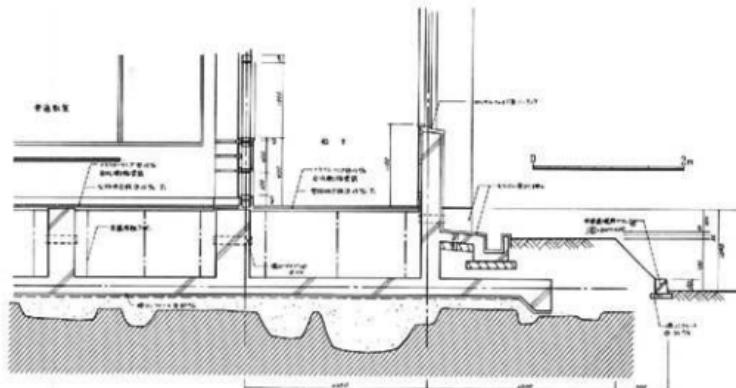


fig54 校舎遺構保存工法図

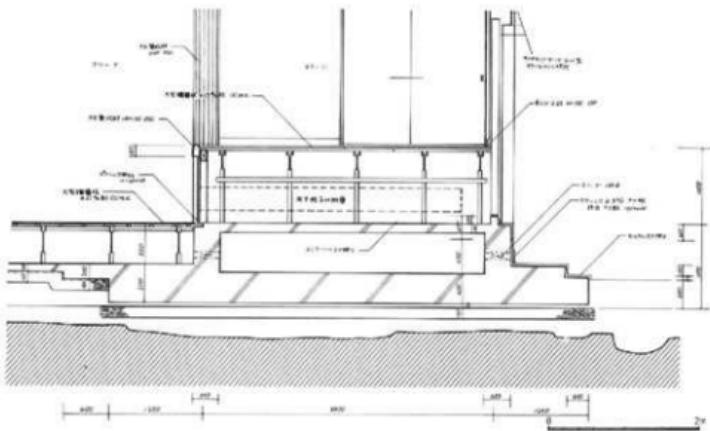


fig55 体育館遺構保存工法図

今回の一連の学校施設の新築にともなう遺構の保存については前回にもまして、文化庁記念物課の強力な指導があり、三重県教育委員会とも協議を重ねた。そこで合意された基本的な事項は、建物床下に遺構を全面保存することであった。

このような基本事項にそって、検出された遺構の状況を充分ふまえながら、プールについては、設計を担当した株式会社創和建設設計事務所と、工事を受注した株式会社村田組に説明し、以下のように実施された。

すなわち、発掘調査終了後遺構の全面にうすぐ砂をまいた後遺構検出面上約10cmまで排土をうめもどし、充分に転圧した後、その上に基礎工事が実施され58年10月に完成了。

一方、昭和59年度事業である体育館新築、校舎増築についても、文化庁記念物課の指導のもとに、先に合意された基本事項を順守することで具体的工法を考えることにした。そのため、三重大学工学部助教授北原理雄氏に指導を頼い、校舎の設計管理を担当した日新設計株式会社、同体育館を担当した第一設計株式会社および基礎地盤の調査にあたったカツマコンサルタント株式会社、構造設計を担当した木村建築構造設計室などの関係者並びに発掘調査に協力していただいた三重県斎宮跡調査事務所の間で協議をかさねた。

この協議と並行しながら、基礎地盤の性状と支持力特性を把握するため、カツマコンサルタント株式会社による平板載荷試験およびボーリング調査が、校舎・体育館予定地とそれに接して9ヶ所において実施された。

協議の結果、体育館については、造構検出面をおおう状況まで砂を入れ、転圧の後建物基礎



fig56 平板載荷試験・遺構埋め戻し状況  
つしかない斎宮跡を後世に残すことを基本的な視座として、関係各方面が相協力してその実をあげえたことは、まことに喜ばしい次第である。

が周囲に 6.4 m の幅の広いコンクリートによる延基礎工法をとり入れて、遺構の保存につとめるとともに建物の強度を保たたせた。以上の工事は体育館本体工事を受注した株式会社村田組によって実施された。

一方、校舎増築部分については、遺構の保存方法は体育館同様としたが、建物重量等の違いから、次のようにおこなわれた。

既設校舎における、基礎構造は、従来の独立基礎構造であったが、今回は、建物の荷重を約  $60\text{m} \times 10\text{m}$  の耐圧スラブ全面で支えるというべた基礎構造が採用され、桁行、梁間とも多数の壁梁、大梁が用いられた。さらに 1 階の床は荷重を少なくするため盛土ではなく鋼製床組の下地が用いられ、また建物全体のコンクリートは軽量コンクリートが使われている。こうした校舎増築部分の工事は、株式会社北岡組によって実施された。

このように、斎宮小学校諸施設の建築にともなう遺構の保存については、全国でただ一

---

史跡斎宮跡  
斎宮小学校内発掘調査報告

昭和60年3月30日

---

発行 明和町教育委員会  
印刷 光出版印刷株式会社

---

